

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先：
東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号 400円

特集

暮らしの中のアジア Part II

逐次刊行物

昭和63.2.23

国立婦人教育会館
婦人教育情報センター



- 砂糖—飽食と飢餓のしくみ ●日本人は海老が好き
- 茶を摘むのは女たち ●パーム油を知っていますか
- 熱帯林と日本人の消費生活 ●女の健康と家族計画
- コーヒー市場を支配する富める国々 ●輸入されるアジアの米

No.19

1987.11

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!

アジアの人々から奪わない私たちの生活をつくるう／

生産者と消費者が「お互いの顔の見えるつきあい」を求める産地直送運動が着実に広がっている。「自分さえよければ」というエゴがぶつかり合っていた時代を経て、作る人と食べる人がつながり始めたのだ。

しかし、こうした産直運動に関わる人々の視野にアジアは入っているだろうか。「輸入食品の安全性」をテーマにした集会で、一人の女性が「真つすくなキュウリや一年中食べられるトマトを作らせたのは誰か」と、消費者の賢識な好みが日本の農業を不自然で不健康なものにしたことをついた。ところが彼女は、輸入食品の話になると「どんな農薬が使われているのかも分らない外国の農産物を食べさせられるのはごめんだ」と言った。彼女には、農薬で健康を蝕まれながら先進国向け農産物を作らせられている第三世界の生産者（多くは女性たちだが）の顔は見えないようだ。国内の原生林を守る運動が燃え上がったが、運動の担い手の一人が「木は輸入できても、森は輸入できない」と言ったという。この人は、「日本は自国の森林は守っても、第三世界の熱帯林を破壊し、そこに生きる先住民族の生活をおびやかしている」というアジアからの批判は届かないのだろうか。

私たちの暮らしはアジアの国々から輸入された食品、商品に囲まれている。それがアジアの人々、アジアの女たちの手でどのようなように作られているかは見えにくい。香りのよいセイロン紅茶を摘むスリランカのプランテーションの女たち、農薬まみれのバナナを洗うフィリピンの女子労働者たち、インスタント・ラーメンやマーガリンに使うオイルパームの実を拾うマレーシアの母子たち、インドネシアの冷凍品処理工場で輸出用エビの皮をむく少女たち……女たちの汗と涙で生産された食物が、飽食日本の食卓に今日も並んでいる。

モノを通じて日本とアジアの関わりを知りたいと、アジアの女たちの会は一九八一年に一年間『暮らしの中のアジア』をテーマに公開講座『女大学』を開いた。「有毒なものをアジアに持ち込むな」と味の素、粉ミルク、化粧品、避妊薬などの輸出品をやり玉にあげ、「資源をアジアから奪い尽くすな」と、魚、エビ、バナナ、紙などの輸入品を問題にした。アジアと日本の不平等な経済関係が、どれだけアジアの人々の暮らしを破壊しているかを知った（『アジアと女性解放』11号）。

それ以来六年——日本はさらに経済大国になり、私たちの身の回りにはモノがあふれかえっている。一方、アジアの国々は、経済開発を進める新興工業国（NICs）と、経済が停滞している最貧国（LIC）に分極化しながらも、民衆は貧困と抑圧に苦しんでいる。その中でも最も貧しく、最も抑えつけられているのは女たちである。

ここで、アジアの女たちの会は、もう一度暮らしの中のアジアを点検し、私たちの暮らしのあり方を問い直すそうと『暮らしの中のアジア』PART IIとして、この一年間『女大学』で日本に入ってくる食品、商品について、アジアとのつながりを調べた。私たちの生活がいかにアジアの女たちの犠牲の上に成り立っているかを知らされた。

根本にあるのは、先進国の利益のための開発が進められたことである。多国籍企業や政府開発援助が、貧困や飢えをつくり出しているのだ。八億人が飢えていることと私たちの浪費的な暮らしとは無関係ではない。

生産を担うアジアの女たちの告発を受けとめて、アジアの人々から奪わない、環境を破壊しない生活に切り替え、アジアの人々と共に生きる道を求めていきたいと思う。

一九八七年十一月「アジアの女たちの会」十周年を前に

砂糖

飽食と飢餓のしくみ

北沢 洋子

砂糖は、私たちが生きていくためには、欠かすことのできない食品です。この砂糖を通して、「飽食と飢餓のしくみ」を考えてみましょう。

血ぬられた砂糖の歴史

一四九二年にコロンブスが新大陸を発見し、メキシコのマヤ、ペルーのインカを滅して、金を略奪し終わると次に始めたのが砂糖の生産だったのです。カリブ海のエスパニョーラ島(現在のハイチとドミニカ)で、早くも十六世紀の初めに、砂糖生産を始めています。

当初はスペインのならず者とか移民を連れて行って、現地のインディオを使っていたのです。砂糖生産は、たいへん労働力を必要とします。たとえばアメリカ南部の綿花ですと、一人が五エーカーから一〇エーカー(一エーカーは四〇アール)を耕すことができますが、砂糖ですと一人で二エーカーがやっとなのです。それと同時にある時期にだけ労働が集中して必要なのです。

この三角貿易が三百年も続いたので、その間にアフリカは、大規模な奴隷狩りによって、疲弊していったのです。またイギリス時代のプランテーションでは、たばこ、綿花なども生産していましたが、一番儲かったのが、砂糖だったわけです。

その後、あまりにも砂糖が儲かるというので、だんだんと地域が広がり、色々の国々が参入して来ました。フランスがカリブ海植民地で、ポルトガルがブラジル、メキシコで生産し、十九世紀になるとスペインがフィリピンのネグロス島で、インド洋

で、現地労働力を賄うことができなくなり、十六世紀の中頃から、アフリカで黒人たちをつかまえ、奴隷にして連れて来て、奴隷の労働で規模を大きくしていったのです。

砂糖と産業革命

奴隷貿易の起点としてイギリスの港町、リバプールが今では考えられないほどの繁栄をしておりました。奴隷貿易にまつわる後背地として、色々な産業がおこり、造船業、バミンガムでは鉄工業が栄え、ランカシャーでは綿布とか織物等、やがて産業革命へと準備をしていたわけです。現在の国際貿易の最も重要な品目は、石油ですが、十九世紀では、鉄鋼、十八世紀では、信じられないかもしれないがなんと砂糖だったのです。

現在でも南米のガイアナ、カリブ海のバルバドス、モリシヤス、フランス領の植民地マルチニーク、フィリピンのネグロスでは、飢餓の状況がすごいです。何もかもが地主のもので、砂糖キビの農業労働者は、まったく何も所有せず、自分の家の前にトウモロコシさえ植えることもできません。

のモリシヤス島、フランス領のレユニオン島、十九世紀の終わりになると、オーストラリア、南アフリカ(当時イギリス領)などで生産が始まるわけです。

いまだに続く過酷な砂糖農業労働

現在でも南米のガイアナ、カリブ海のバルバドス、モリシヤス、フランス領の植民地マルチニーク、フィリピンのネグロスでは、飢餓の状況がすごいです。何もかもが地主のもので、砂糖キビの農業労働者は、まったく何も所有せず、自分の家の前にトウモロコシさえ植えることもできません。

私は南アフリカの砂糖キビ労働の状況を見たんですが、安あがりになる為に子供を使うのです。ヒョロヒョロの体をした十歳から十五歳の男の子が大きなナタで刈っていくのです。機械でしたらケガをしないのですが、ナタで切るので、熟練してないと足を切ってしまうのです。ですからケガがすごく多いのです。黒人の中でも最も恐れているのは砂糖キビ農園に送りこまれることなのです。南アフリカでは黒人の失業者があふれていますが、砂糖キビ農園だけは、地獄だから行きたくないと言います。南アフリカ政府は、パス

(身分証明書)狩りをして牢屋に入れ、六ヶ月たつて出てくるとそのまま砂糖キビ農場に送ってしまいます。一種の刑務所なのです。

日本はそこから一九八五年まで需要の四分の一を買っていました。現代の奴隷労働で生産されたものを私たちが食べることは、道義的に許されないと考えます。この砂糖キビ労働が現代の奴隷労働と非難され南アフリカはILO(国際労働機構)から追放されました。

世界の砂糖消費地事情

砂糖の大消費地はアメリカ、ヨーロッパ、日本です。

アメリカは年間一〇〇万tぐらい消費し、うちの半分を国内生産しています。自国の領土や領土だったプエルトリコ、キューバ、フィリピンから割当制をもうけて輸入し、ある一定の額だけ関税はかけないという国内貿易的取り扱ってきています。そして、六二年、カストロがキューバの政権を取ると、全面的にキューバからの輸入をやめ、その分を他へふり替えています。

ヨーロッパは戦後ビート糖(テンサイ)を生産するようになり、それをひたすら保護したので生産過剰になっていました。EC全体では年間三九〇万tのビート糖を輸出してい

るのです。アメリカの場合は、五〇〇万t生産しても、すべて自国で消費していますが、ヨーロッパはキューバに次ぐ砂糖輸出をしているのです。しかもそれは常に補助金を出してやっています。

ヨーロッパに次ぐ大消費地日本では、国内消費は二〇〇〇三〇〇万tで、日本もまた国内生産をやっています。沖縄、鹿児島で砂糖キビを、北海道でビート糖を作り、それが約七〇万t近くです。米の減反政策があり、米をビート糖へ転換するならば補助金を出すというわけで、ビート糖は増加傾向にあります。

国内の精糖業はかつては有力な産業で、精糖会社は大きな生産能力をもっていました。台湾を植民地としていた頃は台湾からほとんどもってきていたこともあり、そのキャパシティは四三〇万tもありました。しかし、現在の消費は三〇〇万t以下となっています。

輸入砂糖と国内産ものとの価格差があまりにも大きいので、六五年「砂糖の安定価格に関する法律」を定め、輸入砂糖から調整金を取ることにしました。更に八二年には、粗糖を輸入して日本で白く精糖して売るという従来の方法をやることを決定しました。特殊な加工をする以外の精糖工場は日本からなくす劇的な方針

です。そのためすさまじい勢いで、精糖会社、工場の統廃合を実施しました。

将来精糖工場をゼロにすることはつまり、精製済みの砂糖を輸入するということです。タイ、オーストラリア、フィリピン、南アメリカ、キューバなどの砂糖生産国が、アメリカ、ヨーロッパから輸入することになるでしょう。タイ、フィリピンなどの場合ですと、日本から工場を移転しなければなりません。砂糖の輸出に頼っている国は、たいがい粗糖輸出ですから、新たに精製の技術や設備が必要となります。そのためになされないかと危惧されます。

日本の砂糖価格

日本では砂糖はたいへん税金をとられていて商品です。1kgあたり消費税が一六円、関税が四二円、そのほかに調整金三二円の計八九円が政府に納めるお金です。

砂糖の生産コスト	(86.4)
消費税	16円
関税	42
調整金	31
精製費	60
販売費	20
粗糖	
計	169円
	(1kgあたり)

砂糖1kgあたりの生産コストが約一七〇円で、消費者への販売価格は二二〇円くらいですから、五〇円くらいが利潤となります。信じられないくらい安い粗糖を買っていて、私たちはかなり高いものを買わされているわけです。

砂糖価格下落の要因

砂糖生産国は、ブーム期になると、プランテーション所有者は、無茶苦茶に生産を増やします。水田やトウモロコシ畑を砂糖キビ畑にしてしまったので、現在そのつけがきていても言えます。世界的にみて過剰生産であることは明確です。ヨーロッパが農民保護のために、ビート糖生産を保護し、生産拡大していること一つあります。

一九八〇年ぐらいから、トウモロコシからとるコーンシロップが開発され、砂糖からコーンシロップへの転換が急速に行われました。コーンシロップで代用できるもの、たとえば清涼飲料水などはその代表で、しかも大口でした。ココアとトウモロコシが八〇年にコーンシロップ

使用に一度に転換しました。砂糖より安いので、大量消費はいつきよにコーンシロップへ移ったわけです。これが砂糖の不況の始まりでした。三つ目の理由としては、先進国の健康・美容志向があげられます。砂糖の害が言われ、砂糖の消費が減っているのです。

マルコスと砂糖

一九六五年にマルコスが大統領になったとき、戦後の砂糖の第一ブーム期が来しました。マルコスにとって砂糖は最も政治的な商品で、なおかつ、政治的な産業であったわけですが、七二年に戒厳令を発令して独裁権力を握り、彼の蓄財の手段として産業の国有化をしていたのです。国有化といえは聞こえはいいですが実際は私利私欲のために自分の親戚とか仲間をそのポストにすえていたのです。

砂糖産業でのやり口というと、砂糖産業はマルコスの政敵でもあったロベス財閥が、新聞、電力と共に握っていたのですが、これらを国有化してしまい、砂糖はフィリピン国立銀行の子会社で、砂糖を買い取って輸出する、いわゆる専売制にして、そこを通さないと輸出できないようにしてしまつたのです。

七四年になると砂糖委員会を作つて、そのトップに駐日大使だつた

ロベルト・ベネディクトを置きました。この時期に外国からの借款で、製糖工場を買ったわけですが、七四年、七六年の二年間に十一の大きな工場が出来ましたが、そのうちの七つが日本からのプラント輸入なのです。五つが丸紅、あとの一つが三井、東メン。ほぼ丸紅の独占でした。ところが、七五年に砂糖の価格が暴落して、ローンでプラント輸入したものが借金として残り、債務がたまっていくわけです。逆にマルコスのふところには、はかり知れない程のお金が流れこむわけです。

フィリピンの砂糖

フィリピンの砂糖生産は七四年から変わっていません。けれども六〇年代後半のとき、ブーム期で毎年三〇万トンずつ増やしていました。今では二三〇万トンぐらいの生産能力を持つています。けれども、八四年ごろから始まつた砂糖価格の暴落により、生産は二四〇万トンから一五〇万トンそこそこになってしまいました。生産コストとしてはまったく合わない状態になっています。そのしわ寄せをかぶつていのが砂糖農業労働者なのです。

フィリピンの砂糖労働者

フィリピンの砂糖生産は十九世紀

の後半にスペインが導入して、ネグロス島に集中しました。砂糖農業労働者は二つの階層になっていて、工場で働く人と農場で働く人がいるわけですが、圧倒的に多い農場で働く人というのは、常雇と臨時雇と移動している労働者で、だいたい六対二対二ぐらいの割合です。ネグロス島だけで一〇万人いる労働者の中で六万人が常雇で、常雇といっても最大一八〇日働かしてもらえばという状態です。日当ですから働かない時は、お金はもらえません。

砂糖農業労働者は、何世代にもわたり砂糖キビしか作つてこなかったため、いわゆる農業（イモを植えるとか米を作る）を知らないわけ、働いて賃金をもらい何から何まで買う生活をしてきたわけですが、ほとんど工場労働者と変わらない生活です。そのため石油ショックの後、七四年頃から砂糖労働者がだんだんと食べられないという状態になって、栄養失調が蔓延し、緑や水が豊かでも飢える状態になって来たわけですが、現在、一番こまっている人たちは移動労働者（季節労働者）です。彼等は、仕事がなくなくなるとまさにその時から何も収入がなくなります。トウモロコシを植えると、地主が来て焼き払ってしまうのです。それで、砂糖労働者全国組織を作りました。

労働者の団結に対して地主は、砂糖キビの生産をやめてしまい、畑を荒地にしてしまいます。労働者は自分たちで耕して食べるものを作る共同農場づくりを努力でやらざるをえません。

この場合いちはん問題になっているのは、豊かな農業の中心である米作りの問題です。灌漑をはじめとするノウハウが必要であり、同時に、それが、肥料や農薬をたくさん使わなければならないものなら彼らにとつては絵に描いた餅でしかありません。昔ながらの有機農業をやらなければなりません。彼らにはそれに関して何んの知識もありません。字の読めない農民が理解できるように方法（スライド、マンガ、絵など）で、有機農業を知らせていくようなことが、私たちとしてできるのではないかと思います。

飢えている人たちに食料やお金や衣料を送つてこと足れりとするのではなく、そういう人たちが立ち上がって何かしようとしている、自立して行こうとしているのを、私たちが手助けできるのではないのでしょうか。彼らの運動を助けようと、日本でもネグロスキャンペーンを八四年から始めていて、多くの人に協力を訴えているのです。

（まとめ・小島英子）

女大学

日本人は海老が好き！

内海 愛子

世界からエビを集める日本人

私たちは、かつてエビに高級品のイメージを抱いていた。だが、円高の昨今、エビの値が下がり、大量に出まわりはじめて、高級品イメージも大部うすれてきた。日本人の一人当りのエビ消費量が世界一になったのは一九八二年。この年の年間個人消費量は一・八キロ。輸入量は年々増え続け八五年には、約一九万二〇〇〇トン、八六年には約一九万七〇〇〇トンとその量は、増加している。日本のエビ輸入量は、八二年の天候不順による世界的なエビ不漁の年を除くと、増加を続けている。

一九万トンなどという数字を見ても実感はわかないが、一九八二年にすでに日本は全世界でとれるエビの九割を輸入している。一〇尾のエビの一尾は必ず日本人の口に入るのである（これはFAOの全世界エビ漁獲統計から計算したもの）。八二年以降のエビの輸入量の増加から見ると、私たちの消費比率はさらに大きくなっている。世界中からエビをかきあつ

めて、私たちは食べているのだ。いったい、これだけ大量のエビを、どこから輸入しているのだろうか。頁下の表は日本が輸入する国別の統計である。多い時には五カ国からエビを輸入。なかでもインド、インドネシアの多いことに気づく。

一九六五年には一〇位にすら入らなかつたインドネシアからの輸入が七〇年にはいきなり五位になっている。その輸入量も三六〇〇トンから二万一〇〇〇トンへと急増している。このインドネシア産エビの輸入の背景には、一九六七年のインドネシアの外資導入法の制定がある。この法律が施行された後、日本の水産会社が、インドネシアのエビ漁業に進出してきている。日本捕鯨、極洋、東方水産、大洋漁業などが現地合弁企業で漁獲したエビの輸入をはじめたのである。エビは開発輸入商品の典型である。エビは獲れるから輸入するのではなく、一九六一年に輸入自由化されたエビを求めて、日本企業が海外に進出、特に、エビの一大漁場をかかえるインドネシアに進出して、

漁獲、それを冷凍にして日本へ運んでくるのである。

海底をひたくエビトロール船

産卵期には海が黄色くなるまでいわれ、湧くといった表現がピッタリするほどエビがとれたインドネシアのエビ漁場（イリアン海域）も、今はその面影もない。海底をひたくくようにしてトロールをひいてエビを獲り続けた結果、さすがのエビの宝庫も資源が枯渇してきたのである。

アル島沖で、エビトロール船に乗せてもらった。その時も二時間ほど網をひいたが、五・六キロほどのエビしか獲れなかつた。もちろん最盛期ではないという条件もあるだろうが、エビ以外の雑魚や石や貝が一〇倍以上も入っている。エビをよりわけ金になりそうな魚を拾うと、あとはスコップで海へ捨ててしまう。海が荒れるわけだ。トロールをひいたあとと日本人技術者が語っていた。ガリガリ海底をひつかいて、泥にもぐるようにしているエビを獲るのだから、

日本の国別エビ輸入の推移

位	1965 (S 40)	1970 (S 45)	1975 (S 50)	1980 (S 55)	1985 (S 60)
1	中メキシコ 5,874	メキシコ 7,210	インドネシア 29,941	インドネシア 35,249	インドネシア 36,235
2	メキシコ 5,210	インドネシア 6,386	インドネシア 21,060	インドネシア 27,569	インドネシア 24,356
3	香港 2,579	中国 6,247	中国 9,767	中国 14,501	中国 21,770
4	タイ 1,975	タイ 5,982	タイ 8,837	タイ 8,850	タイ 10,663
5	タイ 1,631	タイ 3,684	タイ 4,662	タイ 8,052	タイ 10,543
6	韓国 1,003	韓国 3,664	韓国 4,139	韓国 4,990	韓国 7,427
7	韓国 850	韓国 3,419	韓国 4,085	韓国 3,684	韓国 7,371
8	韓国 563	韓国 3,058	韓国 3,548	韓国 3,575	韓国 6,974
9	韓国 337	韓国 2,487	韓国 3,395	韓国 3,398	韓国 6,247
10	韓国 183	韓国 2,276	韓国 2,951	韓国 2,731	韓国 5,985
11	韓国 65	韓国 2,060	韓国 2,932	韓国 2,501	韓国 5,447
	その他小計 210	その他小計 10,666	その他小計 21,930	その他小計 28,152	その他小計 39,888
	総計 21,010	総計 57,146	総計 113,672	総計 143,256	総計 182,911
	供給国数 25	供給国数 51	供給国数 55	供給国数 51	供給国数 49

そうなるのは当然であろう。

一九八五年、インドネシアの合併企業の人たちが、すでに資源の減少を訴えていた。企業の採算にあわなくなってきたからである。インドネシア政府が、地元漁民と資源保護を名目として東経一二五度以西の海域でトロールを禁止したのは一九八二年。一九六七年からインドネシアのエビ漁場にのり出した日本は、わずか一五年足らずで、そのエビを食べつくしてしまったことになる。絶滅とまではいかないが、枯渇寸前まで事態はすすんでいる。

スラウエシに広がる養殖池

海がダメなら陸があるさよとばかり、いま、養殖が盛んである。東ジャワの北岸や南スラウエシの海辺を歩いていると、一面の養殖池にぶつかると、淡水と海水を混ぜた汽水を使ってエビを育てるので、沿岸部のマングロープ地帯を伐採してエビの池をつくる。淡水は河川の水を利用する。もちろん、こうしたエビ養殖熱の裏には、日本向け輸出のためのエビ買付競争がある。エビがもうかることを、インドネシア人の養殖池の所有者が知りはじめたのである。

また、養殖で見のがせないのは台湾である。養殖の主体は台湾もインドネシアもウシエビというクルマエ

ビ科のエビである。台湾では草エビと呼んでいる。黒の縞模様はつきりとしていて、ゆでると鮮やかな赤色になる。魚屋やスーパーの店頭などで、最近よく見かけるのが、このエビである。一九八四年から台湾産のエビは第三位の輸入量をほこっている。ところが、八六年には台湾から前年比七〇%増の輸入があり、台湾はインドネシアを抜いて第二位の地位を占めるようになった。この台湾からの輸入エビの主体が、養殖池育ちのウシエビである。

スーパーや魚屋の店頭で、このウシエビをよく見ると、ほとんど大きさがそろっている。日本人は三五グラム前後のエビが好きというので、それにあわせてつくられているのである。

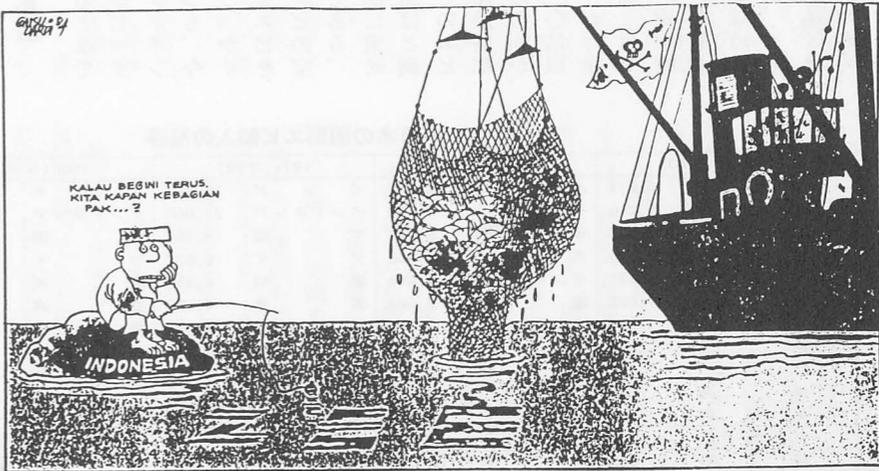
台湾に広がるエビ養殖

台湾の南西部屏東県が、このエビの一大産地である。コンクリートで仕切られた池で、ヘクタール当たり三〇万尾もの稚エビを入れて養殖する。飼料は、魚粉を中心とした人工飼料である。私の見た養殖池では、三二万尾もの稚エビを入れていた。これを夏場四ヵ月半、冬場六ヵ月半かけて育てるのである。一日四回ほど餌を与え、水温、塩分濃度を十二分に管理して、三五グラムにまで育

てる。エビが一キロ育つには、乾燥人工飼料を二・七キロから二キロ与えている(生エサだと約十キロ)。

台湾のウシエビ養殖の技術的問題(稚エビの人工繁殖、人工飼料、親エビの産卵コントロール)が、ほぼ完全に解決したのが一九八三年。エビ養殖は完全に商業ベースにのり、単品では鱈をぬいて、いまや台湾の水産物輸出のトップを占めるようになった。台湾は、日本人のエビ好きに支えられて、養殖にますます力を入れている。エビのメッカ屏東県のように地下水をくみあげすぎて地盤沈下がおこるといふ問題すらおこっている。年間五万トンの生産体制という台湾の年間生産目標の達成も目前である。

私たちのエビ好きが、インドネシアの海から、エビを絶滅寸前にまで追いやり、さらに沿岸の光景まで変えている。日本むけのエビをつくるため、アジアの各地でマングロープを伐採し、池をつくっている。さらに、庶民の蛋白源ミルクフィッシュ



「コンパス」より 1984年4月4日

●エビを集める人たち

アンリ・タンリは王様の末えい

アンリ・タンリは物静かな男である。エビのコーディネイターとして、南スラウエシのS郡では一番力をもっている。広大な養殖池のひろがるS郡、ここで育つエビの五〇%をアンリ・タンリが集荷しているという。実力者である。四一歳、池をまわって歩くので日焼けしているが、物腰に猛々しさがまったくない。向いあつて話しても耳をすましていないと聞こえないような小さな声で話す。村長を五年もやったことがあるが、熱心なイスラム教徒である彼は、今の政府とは相容れない。PPP (United Development Party) の支持者であるアンリ・タンリは、選挙が近づくと、用もないのに軍や警察に呼び出される。あきらかにイヤがらせてある。もちろん、野党であるPPPの選挙活動などむずかしい。

それでも彼がPPPの支持をはっきり表明できるのは、夫婦ともにラジャヤ(王様)の末えいだからであり、金持ちだからであろう。警察や軍も直接、手が出せないのだ。妻は中学校の社会科の教師をしている。夫婦と

もに、この村のオビニオン・リーダーの位置にあるから、政府のいやがらせも執拗である。

アンリ・タンリが、養殖池の経営を始めてから八年になる。遺産で四〇haの池を手に入れた。この村全体で三〇〇haの養殖池しかないから、その一三%を所有していることになる。当然、一人では経営しきれないので、二〇haは小作に出し、残りの二〇haを五人の労働者を使って経営している。エビ養殖である。

アンリ・タンリのもう一つの大きな仕事は、エビの集荷である。S郡の池の五〇%を支配下に収める彼は、毎日、車で集荷にまわる。近くの池の所有者は、毎日、とれたエビをアンリの家へもつてくる。それを、大きき別にはかり、日付けと量、名前をノートに記入する。

大きな氷の冷蔵庫をもつものは、アンリだけなので、エビは全部ここに集められる。氷は、エビの集荷会社の一つB社から支給される。S郡は広い。エビを持ってこれる人は限られている。シボレーで週

に二度か三度、エビの回収にまわる。所要所にエビを回収するキー・ステーションが出来ている。サブ・コーディネイターである。このサブコーディネイターも土地もちの金持が多い。車は、これらのステーションをまわり、氷を配り、エビを集荷する。ここでもアンリの家と同じように、大きさ、量、名前がノートに記入されている。エビは内側にトタンをはった木箱に氷づめにされている。

こうして、集荷したエビを、毎日午前十一時にウジュン・バンタンに送り出す。一五五kmの道を、エビを積んだ車が走る。最盛期には一日に二台、エビの端境期には、一週間に一度のこともある。売り先は、常にB社に決めてある。エビの集荷でしをぎを削っている会社は、他社より、心もち高く買いとつて——といつても、一キロ二〇〇ルピアの上のせなのだが、少しでも多くエビを集めようとする。日本でのエビの需要が根強いからである。

中・小のコーディネイターのなかには、こうした目先の値動きで、売り先を変える者もいる。だが、アンリ・タンリは、そうしたことをしない。常にB社と強力な関係をもつて稚エビを無料で配ってもらったり、資金が不足すれば保証なして金をか

(台湾ではサバヒイ、フィリピンではバンゴス、インドネシアではバンデと呼ばれる大衆魚)の養殖池が、儲かる輸出用エビへと転換しているところもある。

円の力が、日本へエビを吸いよせるかのように、エビの輸入量は年々、増え続けている。

りたりしている。その金を、彼はサブ・コーディネイターや、池の所有者に無利子で貸している。条件は、エビを必ず、アンリ・タンリに売ること、また、アンリ・タンリは必ずB社に集荷することである。こうして、このB社は、アンリ・タンリが必要とする援助を与え、金を貸すことで、エビの安定集荷を可能にしている。エビで一もうけを企む新興企業家が、エビの値動きに厳しい目を光らせているのに対し、アンリ・タンリは封建的な温情支配の関係をエビ集荷のシステムにもちこんでいる。養殖池のエビを商品作物として、インドネシアの人たちが考え始めている。エビをつくればもうかることを人々は理解し始めたのだ。これまで、インドネシア人の国民魚ともいふべきバンデンにかわつて、エビを育てようとする。水田をつぶして、エビの養殖池をつくらうとする人もいる。自分たちが食べないエビをただ、売るためにだけに養殖する。コーディネイターは、こうした農民(漁民)を、資本主義生産にまきこんでいくコーディネイターでもある。今日もエビをつんだ車が昼夜の別なく南スラウエシの道を疾走している。

(内海愛子)

女大学

茶を摘むのは女たち

スリランカの紅茶と日本

小島 英子・中善寺 礼子

セイロン紅茶で名高いスリランカは、生産量の九〇%を輸出している(85年、二二万五〇〇〇トンのうち国内消費は二万トン)。主な輸出先は、イラク、エジプト、シリア、サウジアラビアなど中東諸国。独立当時は総輸出高の六〇%を紅茶が占めていたが、近年では価格の下落もあって、三〇%近くに減っている。

日本では紅茶の国内生産を、七一年の紅茶輸入自由化後、事実上やめた。そして、輸入紅茶の四五%をスリランカから輸入している。

紅茶はヨーロッパ文化として明治時代に日本へ入ってきた。このため紅茶のイメージはヨーロッパ風だが、原産は中国の雲南省で、中国、インド、スリランカ、バングラデシュなどで生産され、現在ではケニア、マラウイ、タンザニア、南アフリカなどのアフリカ諸国でも生産され、その量も増えてきている。

イギリスでブレンドされ、世界中に輸出されている紅茶のなかには、アジアとアフリカが入っているわけである。

紅茶は茶の葉をよく発酵させてつくる。茶の栽培に適するのは、亜熱帯や熱帯の高温多雨地域で、水はけがよく、霧が発生しやすい所がよい。茶園は山の斜面を利用してつくられる。スリランカでは海拔一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルの島の南部ヌワラエリア、ウバ、キャンディ、ティンブラなどが主な産地。

紅茶の製造過程は大まかに、茶摘み→萎凋(なえさせ)→揉捻(もむ)→玉解き(ほぐす)→発酵→乾燥→篩分け→ブレンドに分かれる。製品は葉の形のままのリーフティーと、細かく砕いたブロークンティーの二タイプ。ティーバックは七五%がブロークンティーだが、スリランカではリーフティーの製造が大半である。

スリランカでは茶摘みの一〇〇%近くを女性の手で行っている。ほとんどの国が機械摘みを行っている現在でも、一芯二葉を指先で摘み、高級茶のイメージを売りものにしていく。ティーエステート(四ヘクター

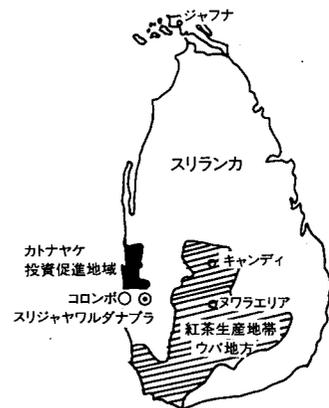
以上の茶園)で働いている女性たちは十歳の少女から老人まで茶摘みをしている。

茶園労働者タミル人

スリランカで茶の栽培が始まったのは、イギリスの植民地になってからの一九世紀中頃、イギリス人によってティープランテーションがつくられた。これをつくるために、南インドの貧しいタミル人家族を、労働力として強制的に多数連れてきたのである。彼らはインディアン・タミルと呼ばれ、古くからいるタミル人と区別されている。

一九四八年スリランカは独立したが、この時、市民法で茶園にいるタミル人の市民権がなくなった。そのため参政権はおろか、商売をしたリ、土地をもつて農業をすることも全くない状態になったのである。こうしたタミル人はほぼ一〇〇万人。インドとスリランカは何度か協定を結び、六〇万人はインドが引き取り、残り四〇万人にはスリランカが市民権を与えるということに決ったもの

は少ない。しかし、80年以降、ティーバックやリーフティーの消費は減り、インスタントティーや、缶や紙パックドリンクの形での消費が急激に伸びてきている。これからは高級イメージとともに、手軽さ、簡便さがうけて、加工紅茶が私たちの生活により多く取り入れられてゆくだろう。



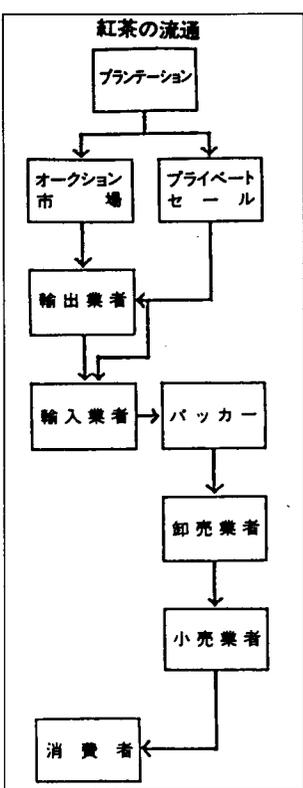
スリランカ民主主義共和国の概観
カトナヤク 投資促進地域
コロンボ ①
スリジャヤワルダナプラ

スリランカ民主主義共和国の概観
ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地をへて一九四八年、英連邦自治国として独立。72年共和制となり国名をセイロンからスリランカに改称し完全独立。人口一五六一万人(84年)、シンハラ人74%、タミル人18%など。首都スリジャヤワルダナプラ(85年1月に遷都を開始したが、主要機能はコロンボに残っている)。公用語はシンハラ語。宗教は仏教69%、ヒンズー教16%、イスラム教8%、キリスト教7%。三大輸出作物は紅茶、ゴム、ココナツ。通貨はルピー。日本からゴム、亜鉛、繊維、陶器などの企業が進出している。

の、なかなか実行されず、いまだに約五〇万人のタミル人が無国籍のまま茶園で働いている。ジャフナで独立運動をやっているタミル人とは直接関係のないのに、同じタミル人というだけで、茶園のタミル人もシンハラ人の迫害を受けることが多い。

七五年にティーエステートの六三%が国有化され、二つの公営企業が管理し、面積で五九%、生産高で七八%がこれに属している。残りは個人経営の小さな茶園である。国有化後もタミル人労働者の労働条件や生活環境はほとんど改善されないままになっている。これはマネジメント計画がなかったり、イギリス人経営者たちが土地を接収されて本国へ帰ったり、後継者がいなかったり、イギリス人バイヤーが紅茶を買わなくなったため、質量ともに落ちたことが原因となっている。

紅茶の機械生産



茶園内の工場で作られた紅茶はコロンボでオークションにかけられる。大口バイヤーとして、リプトン、ブルックボンド、ハリソン・クロスフィールドの三社があり、茶園を国有

日本の消費者へ

イギリスはスリランカの代わりにインドやケニアに紅茶を求めていたが、これらの国では、CTC(Cut, Tear, Cut)という機械を使って、全自動で紅茶の大量生産をやっている茶園が多い。スリランカのCTC導入は五つの茶園だけで、他は伝統的な方法(機械化されていても六、七〇年前のものでやっている)。

化しても流通や販売は外国の小数大企業が握っているため、スリランカの利益は低く抑えられてしまう。紅茶が消費者へ届くまでには多くの業者の手をへて価格が上がる。日本では高級品がもてはやされるといいうことで、たとえば一キロ一万円で入札された紅茶が、日本へ来ると一〇万円にもなる。一杯(約二グラム)当たり三〇〇円になる。市販されている普通の紅茶は一杯が六円から四五円(スリランカで市販されている紅茶は一杯約一・五円)くらいだから、この高級茶は主に贈り物用として使われ、紅茶のイメージを高め、そのことが消費者にも喜ばれているのが現状である。貴族趣味や稀少価値を宣伝し、過剰包装で飾りたてる企業の戦略は当たっているといえる。

紅茶はスリランカから船で二週間かかって運ばれてくる。一月に五回船が入り、バルク(内側にアルミを貼った合板の五〇キロ詰めの箱)単位で輸入される。日本できれいにパッケージングされて店頭に並ぶ。実際に紅茶を摘んでから日本の消費者の手に渡るまでに、早くても三・五〜四ヵ月かかる。

日本では一人、年間約七〇グラムの紅茶を消費していて、コーヒー、緑茶、その他の飲料と比べ、消費量は

日本の紅茶輸入

年次	総量 (t)	総額 (百万円)		1キロの平均額 (円)	
		スリランカ茶	スリランカ茶	スリランカ茶	スリランカ茶
1975	7,493	2,047	5,605	1,118	748
80	7,599	2,603	7,880	5,713	1,037
81	6,836	2,443	6,074	4,367	889
82	7,077	2,687	6,347	4,233	897
83	6,886	2,579	6,318	4,807	918
84	7,674	3,380	6,812	9,755	1,148
85	8,094	3,581			

大蔵省関税局「貿易統計月報」 通産省「通商白書」 ○は約

紅茶農園の女たち

スリランカの一人当たりのGNPはわずか三四〇ドル。これは世界銀行のリスト最貧国四〇の中でも下位に位置する。しかし、この国は平均余命、識字率の伸び、幼児死亡率、出生率の抑制といった点で「奇蹟」を遂げた。ただし、これは紅茶プランテーションで働くタミル人女性には当てはまらない。彼女達の日常が抱える問題は何かだろうか。

①茶を摘む女たちの一日
紅茶プランテーションの朝は早い。女性達の多くは四時に起き、水をく

み、食事を用意し、子供達を学校へ送り出し、掃除を済ませる。七時半の農園の点呼には一分たりとも遅れられない。遅れば、その日の昼までの仕事はない。それは即、収入の減を意味する。点呼で彼女達は、その日の茶を摘む場所の指定を受け、一面に茶畑の広がる丘陵を列を作り歩いて行く。雨が降ろうと風が吹こうと彼女達は茶を摘む。紅茶会社のボスターにある笑顔が本物かどうかはわからない。昼には摘んだ茶の計量がある。計量を待つ列に並びながら自分のかこの中味を丹念に調べる。固い枝や小石が入っていないか。も

しそれらが見つかれば厳しい罰が待っている。そして、それを見逃せば、男性の監理人、計量人も罰を受ける。このため彼らのチェックは厳しく、それが女性への強いプレッシャーとなる。計量が終わると女たちは家へ戻り、ある者は朝預けた子供を抱きあげ、食事をさせ、ある者は終わらなかつた片づけをし、食事を摂り、一時の点呼にまた農園へ出て行く。計量は普通、一日二回。茶の最盛期には三回。午後四時半の計量が済むと約一時間プランテーション内で仕事をし帰宅する。それから十一時に寝るまで彼女達は家事に追われる。

②仕事とノルマ

成人女性に一日に課せられるノルマは八kgから十五kg。あまりにもきついで、ノルマ達成後のことは考えられない。達成後は一kg当たりで賃金が払われるが、それは働けば働くほど低くなるしくみだ。最盛期にはノルマを決めず一kgごとに賃金が払われることもあるし、点呼も早まる。いずれも負担こそ増えるが見合うだけの賃金は得られない。だが生活も苦しく超過労働をしないとやっていけないのだ。

③支出・消費・負債

支出管理のしくみも女性に不利だ。給料日に家族全員の賃金を受け取るのは九〇%以上が男性だし、買い物

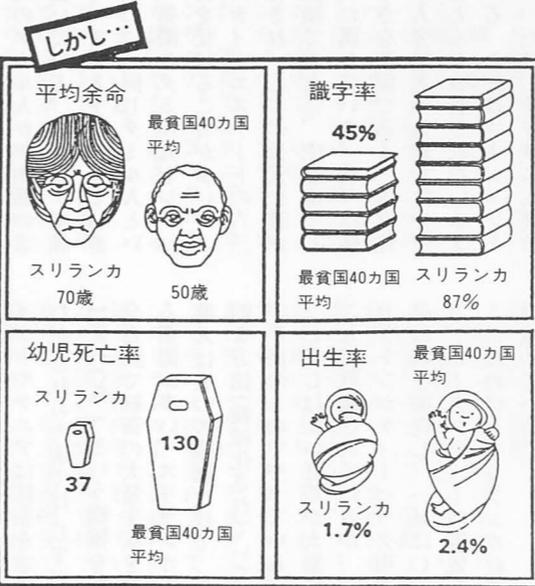
も男性の仕事だ。女性は自分の収入の使い方について、実質的発言権を持っていない。スリランカのプランテーションでは給料日に給料の使い途について女性と男性の間で口論が繰り広げられるという。ただ女性の抗議は弱々しいもので、特に男性の暴力で結着がついてしまう。

米、香辛料、たん白源の魚はプランテーションから家族分が支給される。もちろんこの分は給料から差し引かれるのだが、これは女性には好評だ。男性に渡ればアルコールや煙草、負債の返済に回されてしまう金が、最低限、家族の食費になるのだから。

④福祉と教育

一九七九年、政府とユニセフの協力でプランテーション内にも託児所が設けられた。ところが政府の方針で託児所の職員はプランテーションの外から連れてこられるシンハリ人女性が多かった。言語、習慣の違いはプランテーションとシンハリの村をさらに対立させ、満足なケアを受けられない子供達が少なくなかった。

年間一人当たりGNPわずか340ドル(セイロン中央銀行年報1985年版)のスリランカは、世界銀行の最貧国40カ国リストの中でも下位にある……。



出典：NEW INTERNATIONALIST, NOV. 1981.
(注) スリランカの平均寿命と識字率は「ザ・ワールド'88」朝日新聞社

建物や衛生設備も充分というわけではない。

医療に関しては各農園ごとに小さな医務室が置かれるようになった。薬品については国が基準を設定、集中買い付けで、ほかの第三世界の国々が悩む多国籍企業の支配を免れている。

住宅環境も悪い。その多くがライオンハウスと呼ばれる三m×四mばかりの小屋が横に並んだ長屋だ。窓もドアもないものも多く、イギリスの植民地時代から一度も建て直されたことのないものさえある。雨も、下水道の不備なども見られる。

⑤健康

紅茶プランテーションで働く女性たちに多い病気は、(a)消化器系上



下水道の不備、(b)呼吸器系—昼夜の気温差、湿度(紅茶産地が高地帯にあるため)、(c)貧血・栄養失調—家族の最後に食事を摂るため。

⑥家族計画

プランテーションで働く女性は本当は子供が欲しい。特に自分の仕事を助けてくれる女の子が必要だ。多くの女性が娘が働けるようになる前と後では自分の仕事の辛さが全く違うと答えている。しかし、「子供がたたくさんいるからプランテーションの生活がひどい」という考えが一般的だ。スリランカでは家族計画というと精管切除と卵管除去を意味する。

スリランカの女性のグループの機関誌「女性の声」にも茶園女性の悲痛な投書が載っている。「未婚女性や夫が亡くなった女性が妊娠して、悩んだ末、どこからか薬を手に入れた。しかし、その薬は作用せず、追いつめられた女性は農薬を飲んで自殺した。私はこんな時に有効なほかの方法を知らない」。避妊手術には家族計画省から女性に五〇〇ルピー、男性に三〇〇ルピーの奨励金が出る。さらに国営プランテーションで働く者には女性に二〇〇ルピーと七日分の賃金、男性に五〇〇ルピーと三日分の賃金が与えられる。この奨励金の格差と男のメンツで女性に手術が強要される。衛生条件とふだんの栄養状

態の悪さから危険が多い。

⑦教育

茶園の子供達は十歳から労働者としてあてにされる。十五歳から十九歳の女子の就学率はわずか六・七%。

⑧暴力

茶園女子労働者の多くはタミル人で、ヒンズー教の女性蔑視階級差別、多数派シンハリ人の憎悪の対象となる。特に夫の暴力がひどい。人種対立の激化の中で、農村や農園で何人のタミル女性をレイプしたが、シンハリ人男性の間で誇らかに語られることもある。

以上のようにスリランカの紅茶農園で働く女性達の状況は過酷だ。紅茶はスリランカの主要輸出品で国内消費は一〇%に過ぎない。しかも、ここ数年、紅茶の国際価格は低迷しており、政府は新たな開発計画を日本をはじめとする外国の援助(私たちの税金)で進めている。先進国向け輸出作物に頼るモノカルチャー経済がインフレを呼び、国民の口に入る食物をさらに少なくしているのに新しく開発された土地は農地ではなくプランテーションになる。貴重な熱帯林を切り、そこに住む人々を押しつけて作られた農園から私達は今度は何を得ようというのか。

現在、スリランカの政治・経済情

勢は大変悪い。悪天候による農業生産の不振、一次産品価格の低落、民族対立による国内・外の投資減、観光業収入の減少などが国民経済に深刻な影を落としている。特に紅茶生産は一九八六年、悪天候のため前年より一%減少した。

紅茶は一九七六年の国連貿易開発会議(UNCTAD)ナイロビ総会で、採択された一次産品総合計画対象一八品目に含まれる。この計画の二本の柱は①国際商品協定締結②緩衝在庫と共通基金の設置である。紅茶は①については準備中だが「輸入割当制」をめぐって伝統的生産国(インド、スリランカ)と新興国(ケニア、タンザニア)の利害がなかなか一致しない。②の緩衝在庫については技術的に問題が残るらしい。

スリランカ茶産業界への外国援助としてはアジア開発銀行や第二世銀の融資がある。国全体をみると日本は最大の援助国。私たちは私たちの税金が本当に紅茶プランテーションの女子労働者など、スリランカの最も虐げられた人々の生活改善に役立つよう使われるのか調査する必要があると思う。

女大学

パーム油を知っていますか

松井やより



十年で十倍に

「ルック・イースト(東方を見よ)」の国マレーシアは、日本人にとって、印象の薄い国だが、実は、私たちの暮らしとのつながりは意外に深い国である。マレー半島をおおう緑のプランテーションの産物は日本に入ってくるし、ボルネオ島の東マレーシア、サバ、サラワク州をおおう熱帯雨林の木材は日本が最大の輸入国なのだ。今日のテーマであるパーム油もまさに二つの国の見えにくいつながりを表している。というのは、パーム油の日本への輸出はこの十年間でざっと十倍にふえ約二〇万トンで、日本が輸入するパーム油の九七・八%がマレーシアからである。それは、マーガリン、インスタントラーメンや揚げ菓子の油、洗剤、はては化粧品原料としても使われ、私たちの日常生活に深く食い込んでいる。そのようなパーム油がどのように生産されているのか、マレーシアの二つのプランテーションを訪れて、初めて知ることができた。

女と子どもの労働に支えられて

入口に極彩色の彫り物をした小さなヒンズー寺院が見え、ゲートを入ると、粗末な木造住宅が並んでいた。それを通り過ぎて、やや小高いところに、二、三〇人がたむろしている。ほとんどが女、子どもでこれからオイルパームの収穫に出かけるところだった。高さ二十mぐらいのオイルパームの林をかなり深く入ると、ほの暗いところで、一人の母親が直径六、七〇cmもあるオイルパームの実を手押し車に乗せたりしていた。四五人の子どもたちが、カンを下げて地面にこぼれた小さな赤い実を拾っ

ている。袋に詰めている子もいる。

五、六歳の小さな子も働いている。こうしたプランテーションの児童労働が社会問題になっていた。「インサン」が一九八四年六つのプランテーション(ゴムとオイルパーム)の二千世帯を調査したところ、九割の家庭で十五歳以下の子どもを働かせていた。パーム園ではその二割が六歳から十歳という幼い子どもだった。子どもたちの労働時間は一日七、八時間、女の子はさらに家事労働もさせられる。しかも、危険な農薬散布までやらされている。マレーシアのプランテーションでは、パラコートや枯葉剤と呼ばれる2・4・5 Tなどの毒性の強い除草剤が広く使われているのである。

なぜ子どもたちが働くのか。子どもに比べて二分の一から三分の一で使える安い労働力だからだ。親にとっては「学校へ行かせる余裕がない」が第一の理由。パーム園の十一%にしか小学校もない状態だ。次の理由は「子どもの手伝いが必要なため」。

女性労働者の生活

プランテーションの貧困は、経済的なものだけでなく、こうした「貧困の文化」と呼ばれる痛ましい状況も指しているのだ。それは、かつて

のイギリスによる植民地支配が影を

落としている。二十世紀初頭南インドの貧しい農民たちをプランテーション労働者として狩り出し、奴隷のように徹底的にしぼり取った。そのため、人間としての自尊心のひとかけらまでも打ち砕いた。その結果、未来への希望を奪われ、絶望の中で、無気力、無責任、受身な人間にされ、酒へ逃避し、そのあげく、暴力に走る。

そのような傷ついて荒れる男性労働者の犠牲になるのがさらに弱い立場の女性であり、子どもなのだ。『トデイ』というココナッツで作った安酒におぼれてアル中になって、妻に暴力をふるう。若い娘をレイプする。ケンカして刑務所へ入る。借金を重ねて高利貸しにすべてを奪われる…。そして家庭崩壊に至る。

プランテーションでは男子労働者が七〇年代大幅に減って、八〇年代に入ると、女性の方が多くなり五七%を占めている。ところが、女性たちの状況は男性よりさらに恵まれない。まず賃金差別は歴然としている。女性の九〇%が月収三十五ドル以下だが、男性は三〇%だけである。そのうえ、家庭での女性の負担は大変に重い。平均七人もの子どもを生み育て、保育所があっても設備がひどい。大抵は掘立小屋のような建物で、

飲料水やトイレも満足にない。やや条件のよい保育所でも、オモチャや教材などはほとんどなく、アヤ(乳母)やおばあさんが子どもたちを見ているという実情だ。

一人のプランテーション女子労働者の日課を見ると、「朝四時に起き、一日分の水を共同井戸に汲みに行くが、行列をして待たねばならない。もどって弁当を作るが、電気がつくのは朝四時から二時までと夜一時から十時までだ。朝六時に子どもを保育所へ連れてゆき、それからゴムの樹液をとる作業に出かけ、午後はパームオイルの収穫に出る。そして、夕方帰宅して、たきぎをとりに行つて、洗たくをして、夕食を作つて、子どもを寝かしつける。いっときも休む間もない重労働の日々である。労働者として、主婦として二重の負担は女性たちの健康を破壊する。そのうえ、パラコートのような有毒農薬の大量散布で、視力障害や鼻血、吐き気に悩む女性も多く、妊産婦の流産も多発している。

多発するレイプ

もう一つ、プランテーションの女性たちの悩みは性的被害だ。オイルパームの林の中の女、子どもだけの収穫労働で、レイプの犠牲になりやすい。私が訪れたもう一つのプ

パーム油の基礎知識

浅野 真貴

1. パーム油は毎日の食卓に

日本においてパーム油は、マーガリン、ショートニング、ビスケットやせんべい等焼菓子の揚げ油とつや出し、ハンバーガー店等でのフライドポテトの揚げ油、また、やし油と併用してコーヒークリーム、アイスクリーム等に使われている。

2. どこから輸入しているの?

九割以上マレーシア、残りはインドネシアから。

3. マレーシアにとってパーム油産業は大事な存在

かつてマレーシアは、ゴム、スズ等一部の製品だけに輸出を依存しており経済は低迷していた。そこで農業を多様化し経済をたて直す為に一九六一年、大規模な栽培が開始された。そして五、六年後には、パーム油の世界最大生産国・輸出国となり、現在ではGNPの約10%を占め、六万所帯以上の農家の家計や、大小農園で就労する25万人の収入源となっている。マレーシアにとって、パーム油は最も重要な産業のひとつなのである。栽培面積は15年間で約30倍、生産量は約50倍にもなっている。(表1・表2参照)

パーム栽培面積の推移(表1)

1960年	54,634hr
1984年	1349,192hr
1990年	1582,000hr

(PORLA=PALM OIL REFINERY LICENSES ASSOCIATION 予測)

パーム油生産量の推移(表2)

1960年	91,793トン
1985年	4,133,037トン
1990年	6,000,000トン

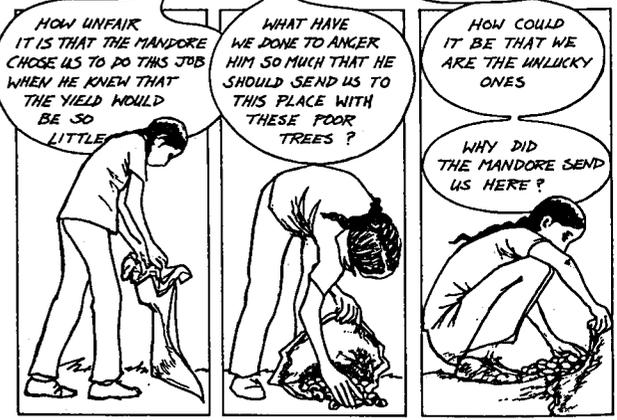
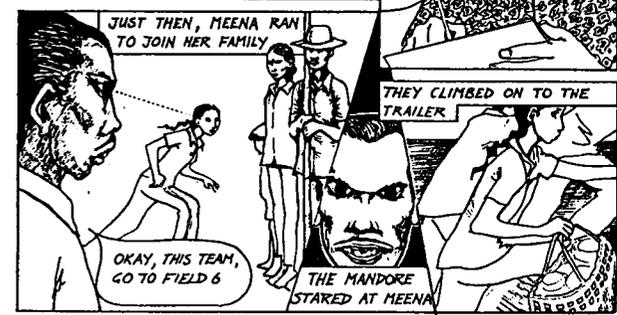
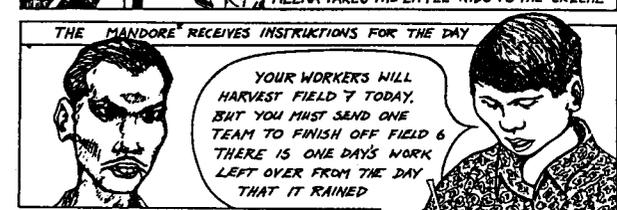
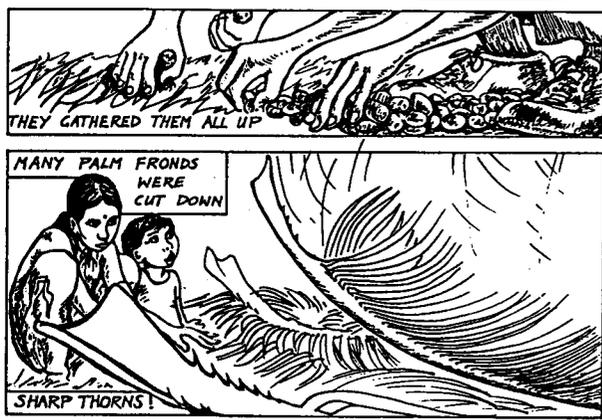
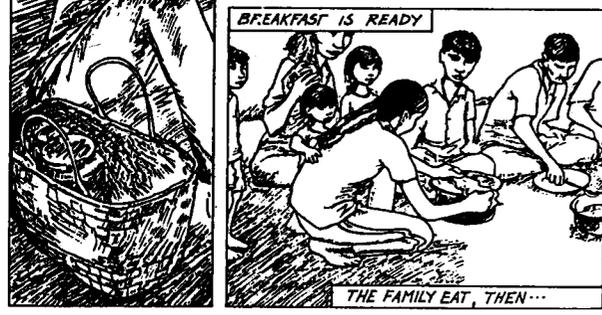
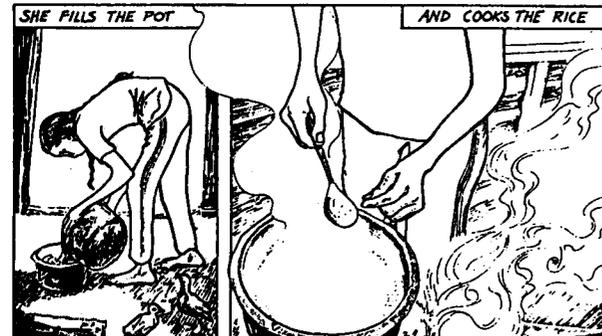
(PORLAによる予測)

4. なぜパーム油が注目されているの?

①多年性植物としての性格から、年12回の定期的な収穫がなされており、ヘクタール当りの生産量が、他の主要油脂(大豆・ひまわり・菜種綿実)に比してきわめて多い。例えば、大豆は約半の生産量である。(表3)つまり、油分の多い果房が短期間で多量に収穫されるので、生産コストが低減できるのである。

表3 主要油脂のヘクタール当りの生産量

油脂植物名(産地)	油脂生産量(kg Ha)	指数
大豆(米国)	319	9
パーム(マレーシア)	3,475	100
ひまわり(米国)	589	17
菜種(カナダ)	409	12
綿実(米国)	140	4



SHE FILLS THE POT AND COOKS THE RICE

HURRY TO THE MUSTER GROUND FOR ROLL-CALL

MEENA TAKES THE LITTLE KIDS TO THE CRECHE

THE MANDORE RECEIVES INSTRUCTIONS FOR THE DAY

BREAKFAST IS READY THE FAMILY EAT, THEN...

FATHER FIXED AN EXTENSION TO THE HARVESTING POLE

MANY PALM FRONDS WERE CUT DOWN SHARP THORNS!

THESE TREES ARE TOO BIG AND OLD TO PRODUCE GOOD FRUIT - THE WAGES FOR TODAY WILL BE VERY LOW

パームオイルプランテーションの子どもの労働問題を取りあげたパンフレット「MEENA」から Excerpts from : EARLY LABOUR- Children at Work on Malaysian Plantations; INSAN and Anti-Slavery Society, 1984.

ランテーションでは、友人の女性がしみじみいった。「マネージャーに就職した夫と共にプランテーションの生活をエンジョイしていたが、働いている女性がレイプされたら職場の男たちが面白半分にウワサしているのを聞いて、女性として耐えがたかった。それがきっかけで女子労働者に関心を持つようになった」。彼女は保育所を改善したり、農業被害を問題にしたり、児童労働の調査にも協力するなど夫の立場もかえりみず活動していた。いわば内部告発者で、女性だからこそプランテーションの人権侵害に素直に怒り、行動するのだ。

このような女たちや子どもたちを犠牲にし、男性労働者も酷使されて生産されるパームオイルだが、その生産は年々飛躍的にふえて現在五百万七(世界の生産高の六割)近くに達し、マレーシアの重要な輸作物物になっていく。プランテーションの人々の汗と涙が、この国の経済を支えているのだ。

の鉄道」と呼ばれた泰緬鉄道建設に労働者として狩り出されたラマサミ教授はいう。帰ってこなかった夫や父や恋人のことが、四十年以上たった今でも語られ続けているのだ。はてしなく続くオイルパームの林の中を歩きながら、過去の軍事侵略が現在につながっているのではと思っ

他人事とは思えない 女たちの溜息

それは、経済侵略——つまり、経済力を持つ国が、途上国の一次産品を安く買いたたくという形をとっている。こうして、日本に入ってきたパームオイルは、私たち日本人の豊かな消費生活を支える。子どもたちの逆境に負けない明るさ、人なつこさに心がなごみ、女たちの溜息に気が滅入ったが、何か他人事とは思えない身近さを感じたのである。

かつて、生産と消費の間はもともと近く、生産する人々の汗のにおいまで感じる事ができた。今は遠く離れてお互いが見えなくなっているのだ。私たち消費者が努力しないと生産者の労苦を知ることができない。両者を隔てる見えない壁を取り除きたいものである。

②プランテーション(大規模農園)管理制度で運営されていたゴム栽培の低迷により、ゴムプランテーションをそのままパーム栽培に転換する事ができ、現在でもその転換が続けられている。

③世界的な、健康志向により、ラードやバター等の動物性油脂にかえて植物油への需要が伸びている。

④石油等、地下資源の将来の枯渇が懸念されているが、パーム油は、今後の工業原料、エネルギー資源としても大きな魅力が秘められている。

⑤融点の違いを利用して分別する事により、性質の異なる複数の油脂を取り出せる。例えば、チョコレートでも、種類の異なる油脂をカカオと組みあわすことで、硬め、軟らかいタイプ、味のさっぱりした品種等様々につくられ、多目的である。

⑤パーム油に関する技術革新にはどのようなものがあるのか?

組織培養の技術により、オイルパームのクローニングが可能になり、その結果、油の収量がより高く、病気に強い性質に品種改良し、増殖する事が可能になった。また、以前は風によるものと考えられていたオイルパームの授粉は昆虫がおこなう、ということがわかり、最も効率のよい授粉の担い手である、エラエイドリ

ウスカメルニカスゾウムシが、カメルーンからマレーシアのプランテーションに運ばれた。それにより省力化及び受粉の効率化がすすんだ。

6. 日本企業との関わりは?

マレーシア連邦土地開発公社(Federal Land Development Authority)が、三井物産、旭電化工業と各々6%、24%、10%の出資で、マレーシア最大のパーム油会社、FELDA oil products SDN, BHD.を運営しており、このプランテーションは、総面積の29%を占めている。FELDAは、'86年からの第5次5カ年計画で17万5千ヘクタールの農地を開拓するが、その70%をオイルパームに充てるという。

また、鐘ヶ淵化学工業、花王、日清は、Malaysia vegetable oil refining SDN, BHD.というパーム油精練工場をもっている。さらに、不二製油と伊藤忠商事は、55%と45%の出資で、バルマジュ社という会社をマレーシアにつくり、63年1月から生産を開始する。パーム油を使用した製品は、不二製油、日清製油、吉原製油、豊年製油、味の素、昭和産業、鐘ヶ淵化学、花王、ミヨシ油脂、リノール油脂らが扱っている。

女の健康と家族計画

家族計画という言葉は、日本ではあまりオープンには語られないので一般に良いイメージでは受け取られていないようだが、家族計画や避妊への理解と実行は、女性の肉体的、精神的健康には不可欠である。世界の国々の中には中絶や避妊の普及の欠如から、妊産婦死亡率が非常に高くなっている国があるように、直接、女の生死にもかかわる問題である。

アジアにおける人口・家族計画活動

飯島 愛子

私は、一九六九年に国際家族計画連盟（IPPF）に所属し、それ以来、家族計画の分野の国際協力にたずさわっている。一九七五年以来、東・東南アジア・オセアニア地域事務局、ロンドン本部等に勤務しながらマレーシア、インドネシア、フィリピン、シンガポール、タイ、香港、韓国などの家族計画の現場を見る機会を得た。このIPPFというのは、国際的組織で、一九五二年に、世界

の八カ国（イギリス、アメリカ、西ドイツ、オランダ、スウェーデン、インド、シンガポール、香港）が、インドのボンベイに会議を開き、結成した非政治的民間団体である。創立の主旨は、宗教、政治、人種にかかわらず、カツプルが子どもの数、出産間隔、出産時期の決定などの事柄を、自らの意志に基き決定できるような人権保障の立場に立ち、家族計画の普及運動を進めるというものであり、そのための資金、物資援助、教育、サービス、調査、研究、人口教育などを行なっている。一二三カ国の主なる民間家族計画団体が加盟し、本部はロンドンにある。

IPPFの発足当時のプログラムは、クリニックを中心として家族計画を広める活動、地域住民との交流、人材養成、物資配布などである。しかし、一九六〇年代に「人口問題」が表面化してから、家族計画を進める活動の形態は変容し始めた。

世界の人口は、一九三〇年には二〇億に、一九六〇年に三〇億、一九七五年に四〇億、そして今年は五〇

億を迎えるといわれている。人口増加の危機を感じたアジアの国々の政府は、人口抑制のための家族計画に着手した。それと共に家族計画の民間団体は増加し、先進国から援助金が拠出されるようになり、国連の人口活動基金が六九年に設置されるなど人口問題にからめた家族計画活動が進められている。今、私がここで疑問に感じる問題は、政府主導によって六〇年に始まった、人口抑制を目的とする家族計画のプログラムについてである。

「子どもは少いほうが幸せ」か？

開発途上国の政府は、先進諸国の援助で、人口増加率を減らすために家族計画プログラムをすすめている。が、子どもの数を減らすことは庶民の生活感覚にそぐわないことが多い。開発途上国の地域では未だ環境衛生が悪く、感染症で子どもが死んだり、子どもが小さい時から労働力として役立っているような暮らしをしている人々や、また子どもは皆、神の授かりものであるというような考えで

生きている人々が多い。そのような所へ行って国家の人口抑制を目的とする家族計画のプログラムを打ち出し、「子どもは少ない方が幸せですよ」と説得しても村人たちに反感を買う結果ともなる。つまり村人の生活の実態が考慮されず、家族計画だけが一人歩きしているのだ。一方、政府が外国の援助に頼っているため、援助国の都合によって援助が継続されないような問題がおこる。また、政府で人口問題にたずさわっている人々は上流階級であり、貧しい人々の生活や価値観に十分な配慮がなされていないなどの問題や、政府と民間団体が一語にやっつけていく難かしさの問題などがあり、七〇年代におけるアジアの国々の家族計画は低迷していたように思われる。八〇年代に入って、アジアの人口・家族計画活動は徐々に軌道にのって来たようだ。

このような状況下で、IPPFに属する民間団体は、家族計画に対する庶民の認識を深め、より良いサービスを行ない、情報を伝えることに努力してきた。私が、IPPFの活動を通じてシンガポールやマレーシアに行った時、そこでは、若い医者が、地域の若い人たちが働いている工場に行つて性教育の話をしたり、家族計画のフィールドワーカーが女性たちを集めて、裁縫を教えながら

女の子産みの自己決定権を求めて

芦野 由利子

家族計画の基本理念は、いつ何人子どもを産むか、産まないかの選択を個人の基本的権利と位置づけている。これは、特に妊娠する機能をもつ女の健康と人生にとって最も核となる権利である。言い換えれば、家族計画は女性の健康権であり、開発途上国の女性にとっては生存権と言ってもいいだろう。家族計画は、単なる人減らしや人口抑制と同義語であってはならないのである。最近欧米では、この権利を Reproductive freedom/right=生命再生産の自由/権利と表現することが多い。

それでは果してわが国では、すべての女性に産む産まないの自決権が保障されているのだろうか。

戦前・戦後の歴史

日本では明治一三年（一八八〇）に墮胎罪がつくられ、中絶が刑罰の対象となった。大正に入つて、「家族計画の母」と言われ、IPPFの設立者でもあるマーガレット・サンガールの来日をききかけに、東京や京都で産児調節運動が起こる。この時のパイオニアには、加藤シヅエ（當時の石本静枝）、山本宣治、安部磯雄、

家族計画を教えるというプログラム、村の人たちの収入づくりを助けながらのプログラム作りなどを行なっているのを見た。タイなどでは、家族計画のイメージを明るくのものにして、コンドームを風船がわりにして遊んだり、イメージづくりをしていた。フィリピンでは、カトリック国であり、なかなか難しい側面があるが、中絶の調査活動が、すすめられていた。タイでも中絶合法化の活動が起こっていた。

IPPFはさまざまな活動を行ない、世界の家族計画に多大な貢献をしているが、一二三カ国もの加盟国となると、資金集めやマネジメント等それなりに難しい問題が多い。

日本はどうかかわっているか

では経済大国、日本がやっていることは何かというと、政府は国連人口活動基金（UNFPA）に四六〇〇万ドルの資金を送っている。そこからIPPFにも一部、拠出金が送られてきている。その他、二国間協力という形で中国、コロンビア、メキシコ、ネパール、フィリピン、タイなどに対して、直接約四〇〇万ドルくらい援助している。私がいる民間の国際協力財団は一九六七年に設立され、開発途上国に向けて人口・家族計画の国際援助を行なっている。

馬島備などがいた。

産児調節運動は、大正デモクラシーの中で社会改革の運動としてもかなりの広がりを見せたが、軍国主義が強まるにつれ危険思想視されていく。やがて、ナチの断種法にならつた国民優生法（一九四〇）、産めよ殖やせよを国策に打ち出した人口政策確立要綱（一九四一）が公布されるに及んで、中絶はもちろん、避妊も全面的に禁止される。

敗戦によって日本の国情は一変し、人口急増対策が国家の急務になった。その対策の一環として戦前の国民優生法の焼き直しである優生保護法がつくられ（一九四八）、中絶が条件つきで合法化される。ただし、中絶合法化について政府は、表向きはあくまで「母性保護」の立場をとった。優生保護法ができたことにより、実質的には墮胎罪は空文化された。

一九五一年、政府は受胎調節の普及を閣議決定し、翌年から全国で家族計画プログラムが始まる。避妊の普及より前に中絶を合法化した国は、世界広しと言えども日本だけである。一九五四年になって日本家族計画連盟と日本家族計画協会（当時は日本家族計画普及会）という民間団体が発足する。

一九六〇年代後半に入ると、出生率低下の一方で高度成長による労働

力不足が一時叫ばれるようになる。

政府の家族計画対策も次第に縮小し、現在では家族計画単独の予算がない状況である。一九七二年〜七四年には、中絶の規制強化をねらった優生保護法「改正」運動が「生長の家」を中心に起こったが、これらの動きは急激な人口抑制に対する一種の揺れ戻しと言えるかもしれない。

優生保護法「改正」運動は結局、女の子産みの自決権を否定し、かつ障害者差別につながるということで、女性や障害者から強い反対の声があり、国会に上程された「改正」案は廃案に終わった。しかし十年後の一九八二年に優生保護法「改正」問題が再燃。女性のあいだから以前にも増して猛反対が起こり、政府・自民党内部も二分するに及んで、法案の国会上程は阻止される。

〈現在の問題点〉

日本の家族計画は「成功例」として国際的に高く評価されている。その主な理由は、短期間で出生率を低下させ、人口急増を防いだという点にある。しかし前述したように、日本では家族計画対策が立ち遅れ、出生率減少はかなりの部分を中絶に負っていた、というのが現実である。のみならず、問題は政府が出生率低下という人口学的視点で、家族

計画の役割を見ていることである。

冒頭に述べたように、家族計画は女にとって不可欠な権利であり、それを実行するために必要な情報やサービスは、出生率の増減とは関係なく、いつの時代にも、どの社会でも保障されなければならない。そういう観点から見れば、日本の家族計画を簡単に「成功例」と言い切ることは問題を感ずる。

現実を見れば、正確な避妊の情報やサービスを得るためのシステムや施設は徹底的に不足している。欧米にあるような家族計画クリニックは一つもない。また人間教育としての性教育、避妊を男女の関係性の問題としてとらえる見方もほとんどない。日本のカップルの避妊実行率は非常に高いが、統計だけを見て満足していられる状況ではないのである。

法律の問題としては、墮胎罪と優生保護法がある。中絶を犯罪とする墮胎罪がある限り、女の子産みの自決権は根底のところまで否定されたままである。従って、墮胎罪の撤廃は今後、女性を取り組むべき重要な課題だと思ふ。優生保護法も、優生思想という差別的な考えでつくられていて、法律そのものが問題であるし、その中に中絶の適応規定が入っているのも非常にちぐはぐだ。世界的に見ても「優生」を冠した法律は日本

にしかなく、あまりにも人権意識を無視したものととして撤廃されるべきだろう。

そして代わりに、妊娠する機能をもつ女性の健康を、避妊・妊娠・出産・中絶とそれぞれの場面で保障するための情報とサービスを普及徹底させるための法律、人口政策に利用されないように、真に女の子産みの自決権を保障する法律、子産みと仕事の両立を保障する法律等の実現を政府に要求していきたいと思う。

近年になって起こってきた問題として、先端医学や生殖技術の「進歩」も見逃すことができない。こうした先端技術は、たとえば体外受精は、一見女性の選択の幅を広げるように見えるが、果してそうだろうか。胎児診断で胎児の性別や異常がわかったり、減数手術(多胎児の一部中絶)が可能になったりすることで逆に、女性はずますます難しい判断を迫られてきている。また昔なら「仕方がないで済んだ」ことも、技術があるがためにそれを使わざるを得ない状況に追いこまれる、という新たなプレッシャーが生まれている。「福音」と言われる体外受精がいかに多額の費用と肉体的負担を伴うものであるか、そうした情報が十分に知らされていないのも問題だ。情報のないところで自己決定は不可能だからである。

先端的生殖技術に共通するのは、セックスという人間関係なしに生命

がつくられることだ。その結果、生命操作(人間の質の管理)に際限なく道を開くことになり、一方で代理母の問題が警告するように、女を単なる子産みの道具におとしめる危険をはらんでいる。そう考えると生殖技術は、子産みの自決権を根底から脅やかすものではないだろうか。

また新生児医学の発達で、胎児の母体外での生育期間が短くなる傾向にあり、それに伴って中絶の許可週数を現行の二十四週未満から更に短縮しようとする動きがある。そうなると逆に墮胎罪の適用範囲が広がることになり、これも女性にとって重大な問題である。

このように子産みの自己決定権の確立には様々な問題がからんでおり、状況はますます複雑になっている。自己決定ということでは人間の欲望を際限なく認めていいのかという問題もあるが、「私からだけ」は私のもの」という視点をまず基本におくことがすべての出発点であるべきだろう。産む産まないの決定を自分自身のからだと人生の問題として受けとめてはじめて、世界の女たちとの連帯も可能になるのではないだろうか。

(日本家族計画連盟勤務)

女大学

コーヒー市場を支配する富める国々

小川 一美子・伊藤 加芳子

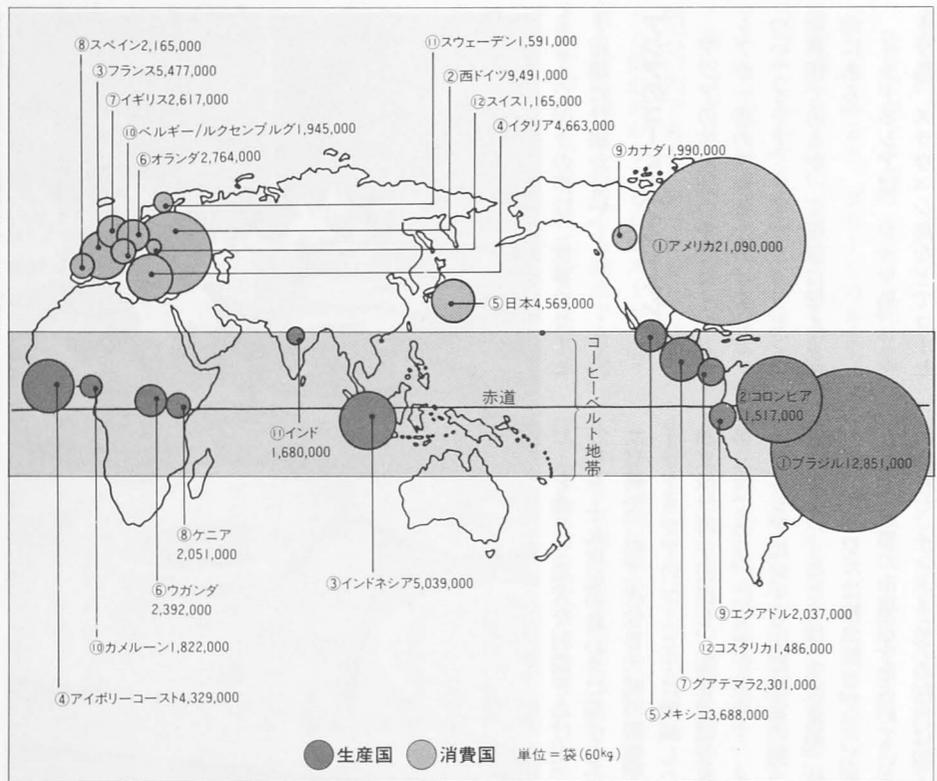
私たちが日頃なにげなく飲んでいるコーヒー。そのコーヒーは、どんなところでつくられ、どんな人たちが生産しているのだろうか。

日本のコーヒーは世界一高いと言われているが、私たちが支払うコーヒーの代価は、適正に生産者のところへ届いているだろうか。ここでは、世界のコーヒーの状況と、私たち消費者とコーヒー生産者のつながりを考えてみたいと思う。

コーヒー地図に見る南北貿易

コーヒーは、国際貿易の中で一次産品としては石油につぐ貿易額をあげている。コーヒーは、供給国側がいわゆる発展途上国、輸入国が先進工業国というパターンをとる一次産品の最も代表的な商品である。

コーヒーの生産国は約六六カ国、地図に輸出量の多い国から十二カ国あげたが、そのほとんどが「発展途上国」である。しかも、多くの生産国は輸出の大きな部分をコーヒーに依存している。(この地図には入っていないが輸出量の少ない国々の方が、その



●生産国 ○消費国 単位=袋(60kg)

傾向が強い。したがって、コーヒーの国際価格やその年の作柄がそれらの国の死活問題になってしまふ。しかし、多くの生産国では、手頃な外貨獲得のため、コーヒーに頼らざるをえず、自分たちが食べる食糧を外国から買っても、コーヒーを生産しているというのが現状である。

地図をもう一度見ていただきたい。主な消費国も示してあるが、その全ての国が北側にある工業国である。これらの工業国は高い工業製品を輸出し、その見返りに一次産品であるコーヒーを安く輸入する。

こうしたコーヒー地図を見ても、はっきりと南北貿易の図式が見えてくる。

国際コーヒー協定と

コーヒーの価格

国際コーヒー協定は一九六二年から締結されている。コーヒー生産国と消費国の需給のバランスを安定させるための協定で、一九六四年には日本も加盟し、現在第四次協定が継続中である。第四次協定は一九八三

豆の選別は日雇い女子労働者によって手作業でおこなわれている(インドネシアジャワ)



るような国々の声は、世界のコーヒー市場には届かない。

アジアのコーヒー(インドネシア)

アジアの生産国の中ではインドネシアが一番の生産量をあげている。ついでインド。タイやフィリピンは新興国であるが、生産量は増える傾向にある。

インドネシアは、ジャワ島、スマトラ島、スラウェシ島などでコーヒーが生産されている。一次産品の多くがそうであるように、インドネシアのコーヒー生産の歴史は、植民地としての歴史である。十六世紀末、インドネシアを植民地化したオランダがその国の輸出のトップを占め、コーヒー価格がその国の経済を左右す

インドネシアは、ジャワ島、スマトラ島、スラウェシ島などでコーヒーが生産されている。一次産品の多くがそうであるように、インドネシアのコーヒー生産の歴史は、植民地としての歴史である。十六世紀末、インドネシアを植民地化したオランダがその国の輸出のトップを占め、コーヒー価格がその国の経済を左右す

ヒを通じて莫大な利益をあげた。しかし、十九世紀の終わりに発生したサビ病や、第二次世界大戦の影響で、インドネシアのコーヒーは激減した。独立後は再び回復し、現在では世界第三位である。にもかかわらず、インドネシアに対する国際協定の割当量は少ない。たとえば、生産量第一位の国、ブラジルは輸出割当が三〇・五％で、世界の市場の半を占めているのに対し、インドネシアの割当は四・五％で国内生産量全体の四〇％にすぎない。これは、インドネシアが国際協定に加盟したのが遅く、ICCOでの力が弱いためと思われる。この結果インドネシアのコーヒー輸出は非割当市場(東欧諸国)に拡大しており、

日本とコーヒーの関係

日本は世界第五位のコーヒー輸入

'84/'85は輸出量の五二％が非割当市場向けであった。東欧諸国は、コーヒーの輸入代金を現金で支払うより他の商品と交換する機会が多い。このインドネシアの非加盟国向け輸出は、ICCOにとって頭痛のタネである。それは、インドネシアが非加盟国に大量かつ安値で輸出しているからである。これに対し、生産国側からは不満が出ており、アメリカなども、共産圏は安くコーヒーを輸入しているにもかかわらず、自分たちは高い豆を買わなければならない」とクレームが出ている。もし、このような理由から、インドネシアが、ICCOから生産、輸出規制をさらに強く受けるならば、生産者にとって大きな問題である。生産調整がおこなわれることにより多数のコーヒー労働者たちが職を失ってしまうからだ。

現在インドネシアのコーヒー関連人口は家族まで含めると、四〇〇〇万人にも達する。その労働者のほとんどは、安い賃金で働く日雇い労働者である。インドネシアでは、コーヒーに代わる収入の道がみつからない限り、コーヒー生産人口増加傾向は続くと思われる。

国である。輸入先は長年ブラジルが一位を占めていたが、'87年、インドネシアからの輸入量が大きく伸び、トップの座を奪った。インドネシアが石油・ガス収入の目減りを補う外貨獲得の柱として、コーヒー輸出拡大に力を入れたことが大きな要因である。さらに、「日本人は高級コーヒーに高い価格を支払うのをためらわない」と、インドネシアの輸出業者が対日輸出を促していると思われる。

日本人の一人あたりの年間消費量は、世界第十一位でまだまだ消費は伸びるだろうと推定される。たしかに日本人にとってコーヒーは身近になった。

一九七〇年の嗜好飲料の調査では、緑茶の消費量が七〇％、コーヒーが二五・三％と断然緑茶が多かったのに対し、一九八五年では、緑茶四二・七％、コーヒー五四・八％とコーヒーの方が上まわっている。特に豆の状態で売られているレギュラーコーヒーの消費量の伸びはめざましく、十五年で二倍にもなっている。これは日本人がより本物を好むようになったからであろうか。

日本人のコーヒー嗜好は世界の状況とはかなり違う。たとえば、英国王室御用達だったというジャマイカのブルーマウンテンは、現在一〇〇％日本人が飲んでいる。ブルーマウ

ンテンは、他の、たとえばブラジル産のコーヒーに比べて三倍近くも価格が高い。また、世界中のコーヒーが飲めるのも日本くらいで、日本の商社があらゆる国に買い付けに行き、高品質のコーヒーを買いあさっているからだ。

先日ペパートのコーヒー豆売り場に行ってみると、グリーンのままの豆が売られていた。そこではその人の好みにあわせて煎ってくれるシステムになっているのだが、ものすごく高い。グリーンのままで一〇〇g四六〇円である。煎ってもらえばもつと値があがる。それはスーパード買回同品種の二倍近くも割高である。そのペパートで売られている豆は、「特別指定農園による高品質」という謳い文句であった。それをたくさんの人たちが買っているのである。

このように私たちは高価格のコーヒーを買う。しかし、その利潤が生産国の労働者まで届かないのはなぜか考えてみたい。

コーヒーは、ほとんどが生豆で輸入されるが、理由は生豆の関税率が〇％であるのに対し、レギュラーコーヒー二〇％、インスタントコーヒー七七・五％と高いことにある。さらに、品質重視の日本人に対し、日本で加工した方が安全であるというのも理由の一つである。保存につい

ても、あるメーカーの話では、生豆は長期保存が可能だが、煎った豆は時間がたつと風味が落ちるとのことだった。

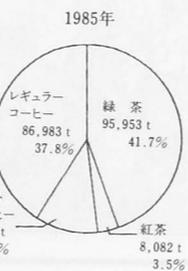
しかし、現在日本で売られているレギュラーコーヒーは、挽いて真空パックにしたものもかなり多い。それを考えれば、生産地で焙煎、または挽いてパッケージングしてから輸出することも充分可能である。緑の豆よりも加工したコーヒーを輸出する方が、生産国の輸出額を増すことができるし、その国の産業を発展させることになるはずである。

現在の関税率を見ても、結局は輸入する日本側の産業の利益、たとえば、加工業者の利益、包装、宣伝業者の利益などを守っていくシステムになっている。インスタントコーヒーについても、ネスレル日本や味の素ゼネラルフーズの市場独占を容認しているのだ。

年々増える日本の「開発援助」。だが真の開発援助とは、対外債務を負わせるのではなく、その国の産業の育成を援助することではないだろうか。したがってコーヒーについても、相手国の加工品について受け入れ口を大きくするべきではないかと思う。今や私たちは嗜好品であるコーヒーも、第三世界の労働力に頼っている。「高級品」「ブランド品」神話に

のせられることなく、コーヒー生産国の人々のことをもつと知り、自分たちと生産者がどうしたらつながっていきけるか考えていかなければならない。

し好飲料(緑茶、紅茶、コーヒー)の消費状況



コーヒーの輸入制度および関税率

品目	輸入統計品目番号	税番	輸入方式	現行関税率			特恵税率	備考
				基本	協定	暫定		
コーヒー生豆	0901-110	0901-1-(1)	A・A (35.4.1)	0%	0%	-	-	
レギュラーコーヒー	0901-120 (0901-200)	0901-1-(2)	A・A (45.4.1)	35%	TR 20%	20%	20%又は0%	特恵0%は後発開発途上国に適用する。
インスタントコーヒー	2102-121 (2102-110)	2102-1-(2) -A	A・A (61.1.1)	35%	17.5%	14%	-	
コーヒーエキス(加糖)	2102-111 (2102-110)	2102-1-(1)	A・A	35%	30%	24%	15%又は0%	特恵0%は後発開発途上国に適用する。
コーヒーエキス(無糖)	2102-123 (2102-110)	2102-1-(2) -B	A・A (61.1.1)	30%	25%	16%	0%	
チョコレート	2102-200 (2102-120)	2102-2	A・A (61.1.1)	30%	10.8%	8%	7.5%	

(注) 輸入統計品目番号欄の()内は輸出

コーヒー生産者と
手を結ぶために

コーヒーの生産によって利益を得るのが、第三世界の生産者ではなくむしろ先進国の仲介業者や企業であるという現状を変えるために、いろいろな努力がなされている。

ヨーロッパでは、Alternative Trading Organization ATO（もう一つの貿易組織）によって、大企業を介さずに、直接食料品を産出国から適正な価格で買い、売り上げの一部をその土地の労働者のための開発プロジェクトに用いるという試みが、一九六八年から行われている。

オランダのStichting Ideale Import SIIは、一九八三年に、ATOの協力を得て、ニカラガアとタンザニアのコーヒーについてこの試みを始めた。たとえばニカラガアの場合、政府機関からコーヒーを買い、それを各国のNGOを通じて販売し、売り上げの一部を財団を通じてニカラガアの教育や医療にあてている。

SIIは、独立した非営利団体である。国家や私人からの寄付・補助金は受けず、また収益が支出を上回った場合は貧しい国々のための基金としてあてられる。その活動の対象は最も貧しい国々であり、所得を公正に分配し、より多くの雇用、保健

の改善、教育、その他の公共事業を進めることによる一般市民の生活水準の向上を目的としている。

日本でも、「日本アンチ・アパルトヘイト委員会（J.A.A.C）」が、タンザニアからインスタントコーヒー「アフリカフェ」を直接輸入して販売している。インスタントコーヒーである理由は、「第三世界から先進国には原料の輸出」という固定観念を払拭したいということ。それによってタンザニアにおける操業率の低い工場を稼働させ、失業率の高い地方の人々の雇用を促進することが目的である。また、J.A.A.Cはアフリカフェの販売利益の中から一部を「南部アフリ

〈紙しばい〉広子さんのコーヒー旅行

主人公の広子さんは、
商社に勤める父親と共に
ブラジルに旅行しました。



主人公の広子さんは、
商社に勤める父親と共に
ブラジルに旅行しました。

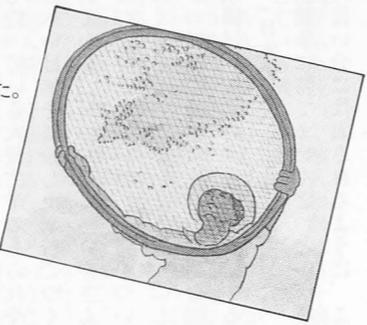
ブラジルは世界で一番
コーヒー生産量が多い
国です。



広子さんは、
コーヒー農園を
見せてもらいました。



暑い暑い日ざしの中で、労働者たちは、
おとなも子どももみんな忙しく働いていました。



広子さんは、ジョアン君と
いう少年と友だちになります。



帰国する前日、広子さんは、ストライキをし
ている労働者の姿を見たのです。



日本に帰った広子さんは
コーヒーについて考えます。



あらすじ

主人公の中学生の少女堀山広子さんが、商社に勤務している父親についてブラジルに旅行する。
広子さんは、ブラジルで収穫時のコーヒー農園をみせてもらい、そこでたくさん労働者に会う。コーヒー農園の持主は大金持でカナダなどに避暑に行くというのに、労働者は暑い日ざしの下で朝早くから夕方遅くまで働いていた。小さな子どもでも学校にも行けずに働いている。広子さんは、その中で自分と同じ年くらいのジョアン君という少年と友だちになる。ジョアン君からコーヒー労働の話聞いて広子さんは驚くことばかり。日雇い労働者たちは収穫が終わると次の収穫場所へと家族ぐるみでトラックで移動する。そして広いブラジルを北から南へと安住することなく移っていくのだそうだ。
帰国前、再びコーヒー農園を訪れた広子さんは、労働者たちのストライキに出会う。コーヒー園では全ての労働者——ジョアン君も——が座りこんでいた。監視役の男の暴力にもじっと耐えて頑張っていた。インフレのブラジルで低賃金のままでは食糧も買えないとストライキ中の女性が言った。広子さんはその結果を知らずに日本に帰ってくるが、心の中には重労働で低賃金のコーヒー労働者たちのことが残る。広子さんは自分が何をしたらいいのかと考える。（紙しばいを貸し出します。送料のみいただきます）

カ解放連帯基金」としている。タンザニア政府が南アフリカ共和国政府の「アパルトヘイト政策反対」を表明していることも、同会がタンザニアと具体的なつながりを持った要因である。
インスタントコーヒー「アフリカフェ」のお問い合わせは、東京都文京区本駒込一―三二―四タキモトビル三〇―NFL気付 J.A.A.Cアフリカフェ・プロジェクトまで。
参考資料
全日本コーヒー協会コーヒー関係資料
自家焙煎技術講座

タイの米と村人のくらし

タイ

タイはインドシナ半島の中央部に位置し、人口約四八〇〇万人、国土面積は日本の一・四倍の五一・四万平方キロ。周囲をビルマ、ラオス、カンボジア、マレーシアの四ヶ国に囲まれている。国民の九五％は上座部仏教の信徒。公用語はタイ語。経済二国間援助では日本は第一位である。

タイは米の国である

'86年の世界の米輸出国はタイが一位、競争相手のアメリカは二位であった。

タイの米生産は二五八〇万ト一八



図1 農家側からみた灌漑比率 (単位: %)

	1963年		1978年	
	農家比率	耕地比率	農家比率	耕地比率
全国	51.5	42.9	20.6	14.7
中部	62.8	60.4	37.1	32.8
東北部	69.0	56.1	38.5	19.8
東南部	36.3	23.7	6.1	3.5
南部	44.1	41.3	9.0	8.2

(出所) Agricultural Census.
(注) 農家、耕地とも樹園を除く。

〇〇万ト(約四〇〇万ト)六〇〇万トのうち米を含む。このうち、年間四〇〇万ト以上を輸出している。タイでは作付面積の約一六％が灌漑されているにすぎない。米のライ当り収量はあまり多くない(図1)。一九六〇年以後、アジアに普及した「緑の革命」も、中部の米作地域に限られ、その他の米作地域にはあまり普及していないようである。雨に依存した稲作は(降雨量平均二二〇〇mm)、降雨が不規則なので不安定である。そのタイの米が、世界第一位の輸出を維持できるのは、生産費が安いことと、政府の米政策の為である。タイは、米の輸出価格を引き下げつつ、世界の米競争をきりぬけている。

ノイ村を訪ねて

北部の農村地帯にあるノイ村を訪ねてみた。

タイの北部は標高一千mを越える山岳地帯だが、盆地や谷あいの平地部では米作農業が行なわれている。ノイ村は、タイ国最北のチェンライ県に属する。チェンライ県は、高い山々をへだててビルマと、メコン川をはさまラオスと、それぞれ国境を接している。

ノイ村は住民約五〇〇人ぐらいの村である。村人は、米、トウモロコシ、野菜など農業で暮らしてきている。畑はほとんどの人がもっているが、田んぼをもっている人は村の約半分。あとは小作と農業労働者である。小作料として収穫した米の半分を支払う。しかし、収穫する前に、一ライ〇タンと決めてしまう場合もあり、その場合は不作の時など農民

の負担が大きい。

'80年に訪ねた時は村には一台のトラクターと数台の耕運機しかなかったが、一九八六年までにトラクターは三台になり、耕運機(クボタが多い)も十台近くになっていった。トラクター、耕運機を持っているのは、村内でも大規模な農家である。村人は耕運機を頼んで土おこしをしてもいい、約一ライ〇タンのモミで支払いをする。かつては水牛でやってきたが、今ではほとんどの村人が耕運機を頼んでいる。

村人は言う、「水牛は草を食べさせたり、水牛泥棒を見張ったりと手間がかかる。耕運機の方が仕事も早い。だから水牛よりずっといい。」しかし、水牛で土おこしをした時は一五ライで九〇〇〜一〇〇〇タンの収穫があったが、耕運機ですると一五ライで八〇〇タン位となり水牛より収穫が少ない。村人の中には土が深く掘りおこされるので収穫の多い水牛にもどった方がよいという声もあるがそれはほんのわずか。

肥料は現金で買うか、収穫する前にモミを売って支払う。普通、モミは一タン二〇バツから二五バツぐらいだが、先売りの時は一〇バツぐらいで売らざるを得ないことがある。この肥料を扱っているのも村の大きな農家である。

てほしいということだった。

その電気は、'87年には村にひかれることになっている。

'87年八月、タイは早魃であった。米づくりをしている農民さえ、米を買わなければならない者もでてくるだろうとタイの新聞は報じていた。

- ※一バツ 約六円
- ※一ライ 一六〇〇㎡
- ※一タン 二〇リットル

(北辺阿貴)

村には三軒の精米所がある。三タン精米して八バツかかる。精米をしてきたヌカも農民は買う。農民が買わないと言えば、それを精米所は自分で売りさばく。このヌカは飼料として高く売られる。政府は精米業者や米穀流通業者には低利の貸し付けをしているが、農民には行わない。農民は、精米業者や仲買人から利率の高い金を借りるほかはない。

(図3)

友人の家の収入をみてみよう。
トウモロコシ 約四百バツ
ピーナツ 約七百バツ
米 約二千バツ
その他(時々野菜の行商をやる) 約数百バツ

このうち、ピーナツは'86年一タン四〇バツだったものが、'87年二月には一タン二三バツでしか売れなかった。また、米も'86年一タン二〇バツ前後が'87年一月には十八バツ

図2 農家現金収支(1978/79:年間)

(単位:バツ)

	農業純収入	農業外収入	家計支出	農業余剰
中部	12,107	12,064	20,831	3,340
北部	8,995	7,239	10,451	5,783
東北部	4,080	6,459	8,281	2,258
南部	8,861	11,314	15,478	4,697
全国	7,575	8,429	12,614	3,390

(出所) Agricultural Statistics 1979/80.

ツぐらいになってしまった。村では今、オートバイが流行している。スズキ、カワサキのオートバイは一台三万バツ。購入した人のほとんどは、米やトウモロコシ、ピーナツなどの収穫時に月賦で支払う。しかし、月賦は返済利率が高くて大変である。払えなくて土地を売る人もでた。(図2)

野菜やトウモロコシは農業協同組合を通して出荷するが、米については華僑が独占している。もし、米を村人たちがまとめて売ろうとするような動きがあれば、その中心人物はいやがらせをされたり、あげくの果ては殺されたりもするとささやかれている。事実この村でも殺された人がいたという。

殺されると言えば、昨年村長が殺された。自分の都合が悪くなると何人か「消した」のではないかとささやかれていた村長が今度は「消され」た。村長が、道路工事費などで国や県からきた金を自分のものにしていくことも村人は知っている。村人は言う「役人は、村や国の事なんか考えていない。自分がえらくなることしか頭にない」

今、このノイ村から二〇〜三〇人の男の人が出稼ぎにでている。首都バンコクを始め、サウジアラビア、クウェートなどの中東、シンガポ

また、タイの米輸出は商務省対外貿易局により行なわれる(輸出量の約38%の以外は、タイ独特の米仲買人である「ヨン」が行っている。米価の決定に権力をもつ華僑によって握られており輸出を支える大きな力である。

タイの米づくりは地域によりかなり差位があるが、ここでは北部の村を通して農民のくらしをみてみたい。



タイの新聞より

女大学

熱帯林と日本人の消費生活

松井 やより

マレーシアのサラワク州では今年三月、ブナン、ケラビット、カヤン、ケニヤなどの先住民が、木材伐採に抗議し十二カ所の伐採道路や橋を封鎖した。これは長い間続けてきた州政府や伐採会社に対する嘆願が受け入れられず、先祖の代から住んでいた土地や森林が奪われ、生活そのものが脅かされたため、やむを得ず行なったものである。このブロッケードは現在、マレーシアや海外の市民団体などの支援を受け、地点を二十四カ所に増やして継続中だ。彼らをここまで追いつめたのは何か、日本との関わりはどうなっているのか。今年一月、ボルネオ島の熱帯林と先住民を取材した松井やよりの報告をもとに考えてみたい。



木材伐採と環境・社会への影響

「父は定住を嫌がって政府に抵抗したが、私の世代になって仕方なく……。木材伐採で動物もサゴ(サゴヤシ)からとったでんぶんもなかなかとれなくなつたからだ。それでも生活は苦しい。ブナン族のワン酋長は語る。彼は息子のアングン君を伐採事故で亡くした。「森が荒らされて、猟に出ても二、三日獲物がとれないこともあり、家族の暮らしを助けようとして山へ行つた」。こうして森を追われやむなく木材会社に雇われた先住民の伐採事故が激増している。年間の死者はサラワク州だけで百人前後、負傷者は三千人にのぼる。「木材生産百万立方メートルに死者七人」は、先進国カナダなどの上には二十倍。その原因は出来高払い制、低賃金だ。「少しでも収入をと、険しい山奥の森林で暗くなるまで長時間働き、疲労で注意力散漫になる」。そしてもう一つが機械導入。「粘土質の伐採道路はスリップしやすい」のだ。

アングン君の死亡補償金を会社は九

千マレーシアドル(五十四万円)と約束したが、昨年払われたのはそのうちの千ドルだけである。

また、インドネシア南カリマンタ州マンキリン村ではダヤク族の女村長スミヤティさんが言う。

「以前は食べ物も十分あつて暮らしに困らなかつたのに、二年前に伐採が始まって村は急に貧しくなつた」。この村の四十七家族はそれぞれ先祖からの土地を七区分して七年ごとに焼き畑耕作で陸稲を作り、近くの共有林で果物、籐、葉草、薪などをとって生活してきた。「新しい山を切り開かず、先祖代々の決まり通りに焼き畑をし、森の大きな木も先祖が禁じたので切らなかつた」ところが、三万六千畝もの伐採権を認められた木材会社により大木が切れ、雨が降ると土砂が流れるので、焼き畑もできなくなった。代わりに村の人々はバナナやトウモロコシを作り始めたが、それを売りに行くのにジャングルを越えねばならない。「往復一日がかりで町へ出ても、たった二千五百ルピア(二百五十円)にしかならな

ブロッケードする女たち



い日もあつた。たばこジュースを買って終わりだ」と嘆く村の人々。そこで木材会社に道路を造れと要求したが拒否された。

熱帯雨林の自然と調和した先住民の暮らしが、伐採によって次々と破壊されていく。

今年三月、横浜で開かれた国際熱帯林シンポジウム(熱帯林行動ネットワークJATAN主催)では、エイミー・ハフィールド(森林保護のためのインドネシアNGOネットワークSKEPHI)が、木材伐採の社会への影響について次のように報告した。

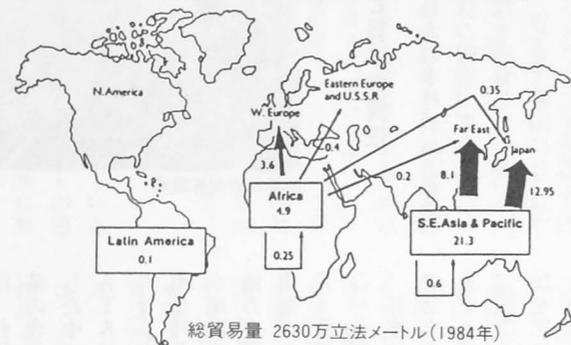
「買春は伐採が始まるまでは、決してなかつたが今では普通の現象だ」「消費文化と近代的な生活がもたらされたことによつて、多くの若い女性が伐採労働者との結婚を熱望するようになった。しかし労働者たちは会社との契約が終われば、その土地を離れ、契約のある「妻の元」に帰ってい

世界の熱帯木材貿易

出典：熱帯木材貿易に占めるヨーロッパの位置 (地球資源調査 Earth Resources Research, 1987)

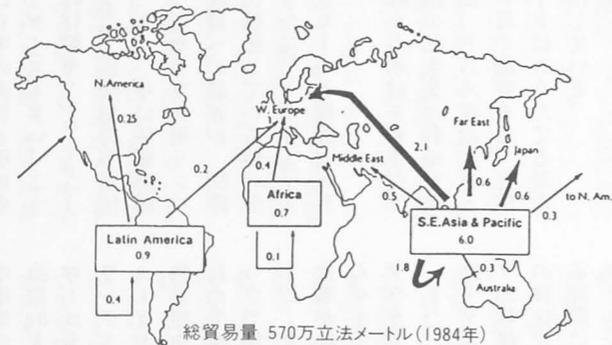
(1) 丸太

ほとんどが東南アジアから東アジア、特に日本への輸出に集中。



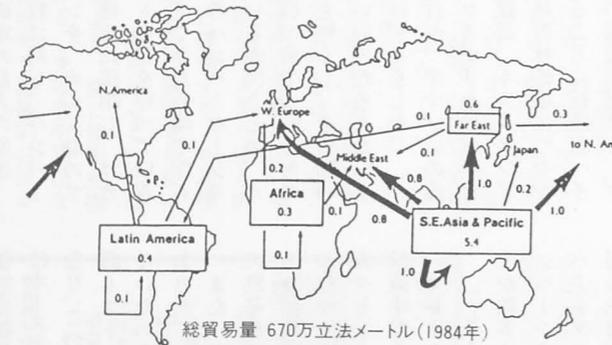
(2) 製材

ほとんどが東南アジアからヨーロッパや日本などの東アジア諸国に流れる。



(3) 合板

ほとんどが東南アジアから輸出される。



熱帯林に関する資料

- ☆熱帯林問題資料集(A4判44頁 600円)
- ☆森林保全と世界の木材貿易……国際熱帯林シンポジウム資料(A4判40頁 500円)
- ☆NATIVES OF SARAWAK—Survival in Borneo's Vanishing Forest ……by Evelyne Hong (英文 259頁 1987年 2,000円)

問い合わせ先=日本熱帯林行動ネットワーク

く。多くの女性が未来も収入もなく、一人で子供を育てる責任だけを持って、取り残されている」。

なぜ今熱帯林か？

熱帯林は地表のわずか七%を占めるに過ぎないが世界の全生物種五百万〜一千万の約半分がそこに生息している。その多くは少なくとも六千万年という長期間に絶えず進化してきたもので、林床から樹冠に至るまで微妙なバランスの上に成り立っている。

熱帯林は既存の米、トウモロコシ、

砂糖、コーヒー、ココア、バナナなどの原産地であるばかりか、新しい食糧や遺伝子、害虫駆除に用いる昆虫、薬、日用品の供給源である。そこにはまた未知の生物種も多数存在するだろう。

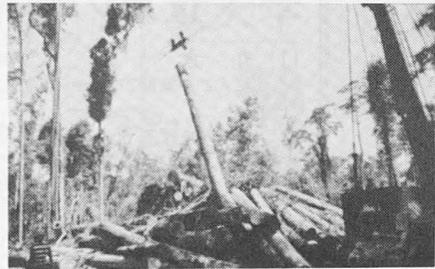
また、私たちが毎日使用している商品には直接的、間接的に熱帯雨林からとれたものがたくさんある。例えばゴム、樹脂、乳液は薬、塗料、インク、石けん、ゴム、ゴルフボール、タイヤなど、芳香油はうがい薬、香料、防腐剤、防臭剤に、油やワックスは食品添加物、潤滑油、ローソク、洗剤

などに使われる。また、繊維や籐は家具やバスケットの材料だし、プラスチック、スチロール、エスデル、甘味料、スパイスなども熱帯雨林の産物である。

さらに熱帯雨林は激しい雨を吸収し、川へ少しずつ放出することで水の供給を調節する。地震や台風など自然災害の影響を和らげる。土壌の侵食と堆積を防ぐ——といった環境維持機能を持つ。そして地球の表面の熱のバランスと、降雨と蒸発作用のサイクルを保つ上で、局地的、地域的そして地球的に重要な役割を果し

ていることも忘れてはならない。このように熱帯雨林は世界の人々、さらに未来の世代にとっても貴重な存在である。ところがその半分はすでに失われ、毎年本州ほどの面積が消えてゆく。

熱帯雨林はその複雑で微妙な生態系のため、一度破壊されると再生に数百年かかると言われている。研究者の中には「再生は不可能に近い」と言う者さえいる。このまま破壊が進めば、現在残っている熱帯雨林の五分の一が今世紀中に破壊されるだろう、と国連食糧農業機関(FAO)は



熱帯林の伐採現場

警告している。

森林破壊と日本の責任

日本は世界最大の木材製品消費国、世界の熱帯木材の四割、東南アジアの生産量の七割を消費している。しかもそのほとんどを生産国にとつて最も利益の少ない「丸太」の形で輸入している(前頁参照)。熱帯林破壊の原因はいろいろとあるが、東南アジア地域では商業的伐採の影響が極めて大きい。よく択伐(選択的伐採)というが、一畝に一、二本しかない巨木を切るにしても、伐採道路、貯木場、伐採労働者のキャンプなどが必要だ。巨木が倒れる時に巻き添えになる木も少なくない。その結果、破壊される森林の面積は平均して全森林の三〇%、最もひどい場合には七〇%を越えると言われる。日本政府や商社の中には、「木を切るのは現地

の伐採会社。日本はそれを買ってやっっているだけ」と言う人もいるが、実際、伐採会社は日本の商社と現地企業の合弁というケースも多い。こうした中で熱帯林行動ネットワーク(JATAN)の調査で、国際協力事業団(JICA)が一九八一年に伊藤忠商事に対して行ったサラワク州リンバン地区の林道建設への融資が、国際協力事業団法に抵触している疑いが濃厚になってきた(詳しくはJATAN II 渋谷区桜丘九一七親和ビル五〇一へ)。

中南米の熱帯林破壊の最大の原因、商業的大規模放牧に対し、ハンバーガーコネクションを、オレンジのプランテーション建設に抗議し、ココアローボイコットなどを行っている。熱帯林を破壊してきた牧場で作られた牛肉がこのハンバーガーショップで使われているか突きとめ、バーガーキングの店の前で「私たちの食事が他国の森を無くし、その国の人々を苦しめているのだろうか」とプラカードを掲げデモをした。

また、世界銀行が、アマゾンの道路・ダム建設、コスタリカやボリビアの牧場(育牛)建設、インドネシアの移住計画など熱帯林破壊につながる計画に融資することに抗議し、イギリスなど世界の環境問題グループとともに一九八六年九月、ワシントンで行われた世界銀行総会でロビイングをした。その結果、世界銀行が援助を行う時には、それが環境や先住民にどんな影響を及ぼすか、事前に調査すべきだ——という機構改革が求められた。

熱帯林を守るための各国市民の試み

イギリス

「地球の友」が、自国の木材貿易と消費の実態を調査した「Timber(木材)」というレポートを出し、消費者に熱帯林を破壊しないようなガイドを提示、そのひとつのシンボルとしてマホガニートイレボイコットを展開。イギリスの熱帯木材輸入量は日本の七分の一から六分の一に過ぎない。

アメリカ

「熱帯林行動ネットワーク」を組織、

先進国中唯一、自国内に熱帯林を持つこの国では、その貴重な森(国土の〇・二%でオーストラリアの生物種の三分の一が集中)に伐採計画が持ち上がった時、環境保護団体が現地に三カ月間キャンプを設営、体を

丸太輸出禁止を求めるロビイングが効を奏し、一九八六年八月、丸太貿易が全面禁止。現在は先住民の土地使用権と土地改革が中心の問題。インドネシア

(まとめ 中善寺礼子)

これからの十年をどうつくるか？

——十周年集会にむけての討論から——

この十年間に日本と他のアジア諸国との関係は深くなってきましたが、日本の市民運動は、八十年代の資本国際化にとり残されています。体制側の動きに対し、私たちの側からの十分かつ有効な批判が出されていないことも明らかなことです。

また、アジアでは、多国籍企業などに関する情報が少ない上、韓国企業がインドネシア進出するなど新興工業国(NICS)の経済侵略も加わり、問題が重層化してきています。

このような状態の中、これからの十年は、善きにつけ悪しきにつけ、日本が情報の発信地になっていくでしょう。日本から発せられる情報はアジアから注目されています。

十周年集会が近づいてつれ、こうした認識に基づいて、「アジアの私たちの会の今後の十年をどうするか？」という議論が行われています。ここにその一部を紹介します。

〈活動方針について〉

●AWAの個人が既に持っているネットワークを中心に、海外との連絡を密にとりながらグローバルに対応して行く必要がある。

●アジアの女子労働者の人権を守るなど、具体的な取り組みを考えると、私達が情報を提供して行かなくてはならない立場にある。アジアでもパート労働者の搾取、周辺化、FA化(Factory Automation)が進行しているの、特に日本の女性がいままでの「発展」の中で受けてきた差別についての情報を出して行く必要がある。年四回程度、ページ数の少ないもので良いから、英文のニュースレターを発行したい。

●国内に関して言えば、アジアの情報が多くなってきたので、本当に必要なものを吟味し、良質のものを出していく必要がある。今の機関誌では「問題提起」で終わっており、いわば骨と皮のみだ。性搾取、多国籍企業、援助の三つを柱にし、内容の濃いものを作るために長期調査に力を入れるべきではないか。

●調査に必要な情報を得るためにもアジアの言葉を身につける必要性は高い。国内で調べるときのポイント

は、グローバルな視点と、ミクロな視点を持つことだろうが、世界が非常に目まぐるしく動いている中で、

これまで以上に学習して行かなければならない。また、それを踏まえて行動方針を出して行く必要がある。

●日本の政策を検討し、代替案を提示していくことも必要。そのためには必要とときに対応できる態勢を整えたい。会員相互でも国籍法改正などでのもう一歩踏み込んだ経験を共有していきたい。

●一人一〜二頁くらいの調査でも、特集的にテーマを追いながらグループでまとめていくと、価値あるものになる。ミニコミだけではなく、出版社にいる会員に編集・出版を依頼することも検討したい。

〈会の運営に関して〉

●国内の会員から寄せられる期待が大きい割に、会として十分に対応できていない。具体的な課題には、◆会に來ている情報をたくさんの方が利用できるように整理する ◆地理的、時間的に水曜会に参加できないメンバーが各々「得意なこと」を活かして係られるよう、常に情報交換できる態勢を作る ◆集会や講演をビデオ、その他の形で積極的に活かしていくことも検討したい ◆運営

張って抵抗した。このため伐採計画はオーストラリア全土で大きな問題となり、この後、熱帯林にダムを作る計画もストップ、貴重な森を破壊させないため六カ所に国立公園の指定がおりた。

また、自国の森だけでなくインドの熱帯林破壊についても調査、ソロモン諸島でも「熱帯林情報センター」が村々を回って、森林伐採に苦しむ人々とともにできることはないかと模索中である。

マレーシア

「マレーシア地球の友(SAM)」などが数多くのロビー活動と広報キャンペーンを通し、森林伐採の影響やバックダム建設計画に対し、世界的関心を喚起している。現在は、サラワクの先住民のプロテクトを支援。フィリピン

インドネシア

前述のSKEPHIなどが、移住政策の実施と伐採による破壊に焦点を合わせ広報キャンペーンを展開、一九八六年十二月「熱帯雨林情報戦

略会議」を開く。

委員会の予定や議事を速報していくことなどがある。

やはり、できる限り早い時期に専従スタッフを置く体制を試みてみるべきではないかという意見も多かった。資金源の確保が緊急な課題となります。当然のことながら会費の値上げ、維持会員(月額一万円)の募集や安定した収入の得られるような事業を検討する必要があります。

さて、これからの十年について皆さんはどうお考えでしょうか？
いま、あなたにできることも含めて具体的な意見、提案、アイデアを期待しています。
(まとめ 松本幸花)

新刊
教科書に書かれなかった戦争 Part 4
私の「昭和百人一首」
生きて再び逢ふ日のありや

解説・高崎隆治 定価・一五〇〇円

〇兵糧をたたくことと戦線に
娼婦の群れは送られにけり

〇兵士等に殺せ殺せと書き寄越す
学童等はけはしき時に生ひ立つ

東京都千代田区神田神保町一四二
03(601)8229 梨の木舎

オロンガボの女たちと 手を結ぼう!

(約三五円)というところもあり、売春せずには生活できない仕組みなのだ。オナーは、様々な名目で罰金を課し、仕事以外の生活をもコントロールする。許可なしには外出もできない。また、客を喜ばせるために様々なフロアショーを強いられる女たちの多くは、麻薬を常用しているという。奴隷的束縛状況の中で、収奪されつくし、身も心もポロポロになっていく女たちがいる。

私たちはこの夏、フィリピンのマニラにある女のかけこみセンター、「WELCOME HOUSE」に泊めてもらい、あちこち訪れた。オロンガボには、アメリカの海外における最大の海軍基地がある。またオロンガボは、フィリピンにおける最大の買春地帯でもある。基地の町と、売買春……男が公然と女を買う町である。

はたして、オロンガボはひどい風景である。アメリカ兵は若いフィリピン女性を抱きながら、他国の街を我がもの顔で歩く。女たちは「ホスピタリティ・ウーマン」と呼ばれ、性病チエックや血液検査などと引き換えにライセンスをもらってバーなどで働いている者(約五千〜六千人)と、街唱(ストリート・ワーカー)といわれるライセンスを持たない者、合わせて一万五千〜七千人もいるという。

バーの数は約五百。そこで働く女たちは、会計係、ウェイトレス、エンターテイナー、ゴーゴー・ダンサーといった名の仕事につく。しかし客と外へ出ない限り、収入は限られている。一晩の労働の代償が五ペソ

えて頂き、機関誌だけでも読ませて頂きたいと思えます。(兵庫 T・K)

熱帯雨林を守る集会に参加してアジアの女たちの会を知りました。開発途上国の開発の問題は、自然環境の保全と切り離して考えることはできません。開発と女性の問題についても、勉強していきたいと思っております。(神奈川 F・K)

最近のアジア・女・通信を嬉しく拝見させて頂いています。大変活発な会の動きを頼もしく思います。維持会費として一万円お送りします。今後、一層のご活躍を期待しております。(宮城 K・N)

ひるば

私は三〇歳、大学の通信教育を受けた。英語、中国語、日本語教授法なども勉強中です。東京から福岡に移り住んで七年になります。地方におりますと会に入っても活動しにくいので東京に帰ってからの入会しようかとも思っておりましたが先日、決心しました。(福岡 J・O)

現在、東南アジア及び女性問題等に関心を抱いております。東京在郷ではありませんゆえ、集会に参加できませんのは残念ですが、会員に加

巫女の魂振りうた 海鳴り花寄せ

魅力を活かしたのとなつています。
* *
古来、巫女の役割は、「魂振り」であったといえます。巫女は、死者の魂を呼び覚まし、語る祭りを担っていたのです。しかし、時代の流れの中で時の権力者たちは、自分たちが犯した罪を忘れよう、忘れさせよう、いつか彼女たちの役割を「魂鎮め(鎮魂)」にすり替えてきました。

現代においても、権力者たちは、かつての戦争の事を語ろうとはせず、「過ぎてしまったこと」として葬りさろうとしています。戦争を体験しなかった世代のうち、いったいどれだけの人が、日本の犯した罪を伝えられているのでしょうか。

「海鳴り花寄せ」が語りかけてくるものは、弔われることもなく、祖国から遠く離れた場所でも今も戦っている女たちの声に耳を傾け、私たちが、生きている女たちが彼女たちの怒りを、悲しみを語っていかねなければならぬ、権力者の思うままに戦争を忘れ、再び過ちを犯すことを許してはならないということなのではないでしょうか。

濱松でスライド「台所からアジアがみえる」上映を計画しています。上映の場で、女たちの会の紹介や、私のアジア体験(わずかでありますが)などを話してみようと考えています。これを機会に、勉強しながら、少しずつでも集まりを持つたり、活動を続けてゆくつもりです。何とも頼りない私ですが、仲間が増えることを祈りつつ、コツコツとやってゆきます。皆さん応援して下さい。

他の地方の方、活動の様子など情報をお寄せ下さい。チャンスがあれば、交流会など、やってみたく思います。お手紙お待ちしております。(静岡県浜松市 八木明美)

死を招く援助 開発援助紀行 B・エルラー 西独元高官による先進国援助批判 1500円

これらのフィリピンと日本 R・アビト 民衆の交流による新しい関係を探る 1500円

アフリカはなぜ飢えるのか L・ティンバレイク 環境破壊の原因と対策 2000円

韓国・朝鮮を知りたい 佐藤勝巳・玉城素・黒田勝弘編 隣国を率直に語る 1500円

亜紀書房 東京都千代田区神田神保町2-9 ☎03-264-8301

活動報告

(1986年11月～1987年10月)

- '86~'87 女大学「暮しの中のアジア Part II」
- 10・15 女大学「熱帯林の破壊と日本人の消費生活」 松井やより
- 11・15 市川房枝基金授与式(婦選会館)
- 11・15 東チモールからミミ・フェレイラさんを迎えて(渋谷コープ)
- 11・19 女大学「砂糖一飽食と飢餓のしくみ」 北沢洋子
- 12・17 女大学「エビから第三世界が見える」 内海愛子 伊徒直子
- 1・21 女大学「女の健康と家族計画」 芦野由利子 飯島愛子
- 1・31 開発教育のジーン・ピッカーズさんを迎えて(渋谷コープ)
- 2・14 「アジアの熱帯林―伐採現場からの報告、松井やより」(共催:アジアの熱帯林を考える会)
- 2・18 女大学「茶を摘むのは女たち」 小島英子 中善寺礼子
- 2・24 カプリエラのアドーラさんを迎えて
- 3・18 女大学「パーム油を知っていますかーラメンから洗剤まで」 松井やより 浅野真貴
- 3・21 国際熱帯林シンポジウム(熱帯林行動ネットワーク主催 於:横浜)参加 (3.23~27 国際熱帯木材機関理事会傍聴)
- 4・15 女大学「日本のコーヒーはなぜ高いか」 小川三美子
- 4・13~25 富山妙子個展
- 4・26 10周年記念集会準備合宿(富坂セミナーハウス)
- 5・6 10周年プレ「フェミニズムについて」 船橋邦子 朴和英
- 5・15 光州7周年集会
- 5・19 スリランカのクマリ・ジャヤワルダナさんを迎えて(渋谷コープ)
- 5・20 女大学「アジアの米と私たち」 手塚洋子 永野晃代 羽田ゆみ子
- 5・23 「どう思う!? 東南アジア女性との集団見合い・結婚」(フィリピン花嫁を考える会)に参加
- 5・27 10周年企画「国籍法改正になるまで」 石田礼子 安江とも子
- 5・28~31 演劇「海鳴り花寄せ」富山妙子
- 6・6 「国会議員と市民によるODA政策討論会」 「REAL主催」に参加
- 6・10 「フィリピンSTOP運動について語り合う会」(HELP主催)に参加
- 6・17 女大学「ファッション戦略―アジアの繊維工場の女たち」 船橋邦子
- 6・24 10周年企画「戦争体験から戦争責任へ」 谷民子
- 7・15 女大学「ME革命とアジアの女性労働者」 遠野はるひ
- 8・15 「8・15反戦マラソン演説会」(戦争を許さない女たちの連絡会主催)に参加 渋谷駅前
- 9・24 富山妙子映画「海鳴り花寄せ」の完成記念上映会に参加
- 10・1~30(連続5回) 松井やよりの連続講座「経済大国日本の女性とアジア」

機関誌「アジアと女性解放」

- 第1号 韓民主化闘争の女たち 300円★
- 第2号 買春観光を許すな! 300円★
- 第3号 日本企業は海外で何をしているか 300円★
- 第4号 アジアへの文化侵略 300円★
- 第5号 いま戦争責任を考える 300円★
- 第6号 アジアの闘う女たち 400円
- 第7号 女と国籍 400円★
- 第8号 続・買春観光を許すな! 400円★
- 第9号 第三世界の女と私たち 400円
- 第10号 光州一周年によせて 400円
- 第11号 特集・暮らしの中のアジア 400円
- 第12号 特集・戦争と私たちとアジア 400円
- 第13号 特集・8.15とアジア 400円
- 第14号 特集・侵略と性 400円
- 第15号 特集・全斗煥の訪日を許さない 400円
- 第16号 特集・アジアの女と人口政策 400円
- 第17号 特集・アジアの女たちの詩 400円
- 第18号 特集・「開発と女性」 400円

★印は現物がありません。送料は1部170円です。郵便振替が切手代用(60円切手)で申し込んで下さい。郵便振替 東京0-46143

ASIAN WOMEN'S LIBERATION English Edition Now Available!

- ★No.1 Asia and Women's Liberation
- No.2 Japanese Economic Invasion
- ★No.3 Prostitution Tourism
- ★No.4 Asian Women in Struggle
- ★No.5 Blown by The Winds of Asia
- ★No.6 Sex Tourism and Military Occupation
- ★No.7 Asian Women and Population Policy

Price: Inside Japan No.1 - ¥300
No.2, No.3 - ¥400

Address (for Order):

Asian Women's Association
Shibuya Coop Rm.211 14-10, Sakuragaoka,
Shibuya-ku, Tokyo 150 Japan

あなたも会員になりませんか?

- ▶年間会費は3500円です。会員には機関誌、ニュースレターを送るほか、会合のお知らせも随時しています。勉強会にも参加できます。
- ▶会員の申込みは下記まで
東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号
- ▶お願い 財政がひっ迫しておりますので、まだ年会費3500円を、振込んでない方は下記まで至急お振込み下さい。ぜひ、機関誌を一人10冊まとめて買い、友人、知人に売って下さい。ご協力をお願い致します。

送付先 アジアの女たちの会

住所 東京都渋谷区桜ヶ丘14-10渋谷コープ211号
郵便振替 東京=0-46143

編集後記

◆表紙を撮影するという試みにチャレンジしました。被写体の商品を買に行ったのですが、あれもこれも、あっちもこっちも、第三世界から原料が来ているものばかり……。極力押さえて買ったのですが、予算はオーバー。本当はもっと揃えたかったんだよ。(小川)

◆1年間の活動報告をまとめてみて、改めて認識しました。アジアの女たちの会って、ホントに忙しい会なんですね。この他にも数ある集會に出没する女たちのなんとたくましいこと、みんな健康に気をつけてね。(Y. T.)

◆19号は「暮らしの中のアジア」グループが女大学で発表したものをまとめました。具体的なモノを通じて、アジアと日本の関係がより鮮明に見えてきたと思います。さてこれから、アジアからモノを奪わない私たちの暮らしをどうやって作っていくか……。(H. Y.)

松井やよりの連続講座

記録ビデオ+記録カセットのレンタル及び販売のお知らせ

この度、松井やよりの連続講座のビデオとカセットテープ(録音)を貸出、販売することにしました。1回分の講演時間は約2時間、ディスカッションが約45分です。共に無編集のものです!! 当日来れなかった方はもちろん、学習会などにもご利用ください。

- 第1回 (日本の経済体制—女性の視点から問う)
- 第2回 (開発と女性—2000年へ向けて)
- 第3回 (日本の中のアジア—モノとヒトのつながり)
- 第4回 (インドシナの女たち—戦争と平和を考える)
- 第5回 (アジアの女性解放運動—真の連帯のために)

	販売価格/貸出し料金	個数	郵便料金	備考
資 料	1回分 200円	1~2	170円	
	5回分 1,000円	3~5	240円	
ビ	販売 1本(バラ) 3,000円	1	350円	資料付き
	VHS 5本セット 12,500円	2~5	(地帯別)	3倍速、60分テープ使用
デ	販売 1本(バラ) 3,500円	1	350円	資料付き
	β 5本セット 15,000円	2~5	(地帯別)	β II、90分テープ使用
オ	貸出 1本(バラ) 1,000円	1~3	(宅配A)	資料1部進呈。
	VHS (貸出期間は原則として 4~5 (宅配B)			貸出期間は相談に応じます。
録 音	販売 1本(バラ) 2,000円	1	240円	資料付き
	5本セット 8,000円	2 3~5	350円 (地帯別)	(貸出しは、ありません)